
とある異常な義弟と過負荷な義妹

不純の道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異常な義弟と過負荷な義妹

【Nコード】

N9635W

【作者名】

不純の道化

【あらすじ】

この物語は上条当麻に明らかに異常な義弟と明らかに過負荷な義妹がいたらというお話です。時系列的には禁書目録には会っておらず、御坂には会っているところから始まります。処女作です。いろいろありますが温かく見守ってください。旧とある鬼才の弟と狂った妹

オリキャラ紹介、独自解釈解説（前書き）

オリキャラ、独自解釈の紹介です

オリキャラ紹介、独自解釈解説

オリキャラ紹介

上条 乱

当麻の義弟で狂の義兄、孤児院で狂と一緒に上条家に拾われた。
年齢は14歳の中学二年生。ジャッチメント 風紀委員

容姿は安心院なじみを小四ぐらいに小さくしたような感じ。（性格はお世辞でもいいと言えないが）

性格は普段は異常アブノーマルを演じているが、本質的には過負荷マイナスとくに球磨川と安心院さんをごっちゃにしたような感じ。

能力は『異常』アブノーマルでめだかボックスに出てくる『完成』ジェンド以外（理由については後述記載）の異常アブノーマルをオンオフ、ハイロウ可能で利用できる。そのためルール有りでの戦いでは負けることはあり得ない（例えばボードゲームでは、行橋の『感受性』と真黒の『解析』アナリシスを使えば負けないと言った感じ）ルールなしでも負けることはあまりない。

また自分自身が『異常』アブノーマルであるという理屈から能力者であるにもかかわらず魔術が使える。（インデックスの思考を呼んだため10万3000冊の魔道書の知識もある）

上条家とわずかな例外を除いてただひたすらにそして平等に実験台
とは思っていない

狂が大好きで（恋愛感情面で）親も二人の結婚を望んでる。（当麻については家族愛程度の感情）

人の事を呼ぶ際は太抵名字で呼ぶ、

親の事は義父さん、義母さん、当麻の事は兄貴、
狂のみ名前で呼ぶ

寝る際は狂と一緒にのベッドで寝ている。（そうしないと寝れない）

意外に肉はまったく食べない。

上条 狂

当麻と乱の義妹、孤児院で乱と一緒に上条家に拾われた
年齢は14歳の中学二年生、風紀委員

容姿は可愛らしいがよく似合う（性格は酷いが）

これまで通ってた学校を例外なく1年以内に潰してきた（15校を
廃校にしてきた）それでどこも彼女たちを引きつけなくなり学園都
市に来た。

能力は『過負荷』マイナスでめだかボックスの『過負荷』マイナス 全てをオンオフ、
ハイロウ可能で使える。そのためルール無しでの戦いでは負けるこ
とはあり得ない（理屈抜きで）ルール有りでもあまり負けない。

だがその理由は、あくまで乱が喜ぶからであって、乱が喜ばない限
り絶対に勝たない。

かつてはは過負荷らしく相手には『勝ったが負けたような気がする』

とゆう敗北の仕方をしていたが乱に会い能力の間違マイナスつたな使い方を教えられ完膚なきまでに勝てるようになった。

上条家とわずかな例外を除いてすべての人間をただひたすらにそして平等に破壊対象としか見ていない。

乱が大好きで（恋愛感情面で）親もこの二人の結婚を望んでる。（当麻は家族愛程度）

人を呼ぶ際は大抵侮辱したような言い方で呼ぶ、
当麻の事は糞兄貴で統括している。

寝る際は乱と一緒にのベッドで寝ている（そうしないと不眠症になる）

筑波 玄

風紀委員長、二人の上司でそのつながりで当麻と仲良くなる、

二人とも仕事はちゃんとするので安心している

能力はレベル3の火炎操作バイロキネシス本来はレベル4なのだが能力検査のたびにスキルアウトたちが抗争を起こすため測れずにいる。（本人はあまり気にしていないが）

またハ レンを見て、「マ タン 大 カッキー」とゆう安易な理由で必要もないのに予備動作で指パッチンをして炎を出す。（発火布の手袋はネットソーハンで買った）

部下たちからは人格者として知られており、そしてめちゃくちゃ怖い人とも知られている。

独自設定

『^{ジエンド}完成』は『^{マイナス}過負荷』まで完成してしまったため、『^{アブノーマル}異常』はもちろん『^{マイナス}過負荷』にも分類されていない

『^{イマジンブレイカー}幻想殺し』の正しい力は異能の力を消すのではなく

全てのものに『^{しゅうえん}終焉』を迎えさせる力であるが今は力が弱まっているため異能の力のみになっている（ちなみに力が元に戻ったらオンオフ可能になり右手から半径30cmが効果範囲である、終焉を向かわせるのは選択できる）

『^{オールフィクション}大嘘憑き』は生命体に関しては自分でおこした事象もしくは自分におきた事象のみ『無かった事』に出来る。非生命体に関してはたいた制限はない。（ガイア理論は成立しているものとしているため地球を『無かった事』にはできない）

オリキャラ紹介、独自解釈解説（後書き）

どうでしたか？

今後書きたす事もあります

感想、誤字脱字の報告歓迎します

義兄弟が来た（笑）！！！！当」（笑）じゃねーよ！大問題だよ！死活問題だ！」

はじめまして、不純の道化です。見てくれてありがとうございます。
週2〜3話ペースで書きたいと思っています。よろしく願います。
す。ちなみに駄文です・・・

「義兄弟が来た（笑）……当（笑）じゃねーよ！大問題だよ！死活問題だ！」

とある高校

SIDE OFF

「不幸だ……」

とある少年がつぶやいたが、しかし誰も取り合わない。

「皆さん、理由ぐらいは聞いてください」

この少年の名は上条当麻。不幸な少年であつた。

「そんなこと言われてもニヤー」

「そやで、いつもの事やしな。」

上から土御門元晴、青髪ピアスが適当に言った。

「で、どうした？上条？」

「聞いてくれるのは、あなただけですよ吹寄さん（シクシク）」

「そんな事どうでもいいから、どうした？」

「それは」

上条が何か言おうとした時

キンコンカンコンと授業開始のチャイムが鳴った。

「はい、今度は先生の化学の時間ですよー」

「はい」

みんなが元気よく返事をした後、入ってきた小萌先生は上条を見て。

「あと、上条ちゃん今回は流石に同情しますよー」

「ありがとうございます」

そして当然のごとく皆が何かの冗談だと思ったようだった。たしかに、レベル5はそうそうなれるものではなかった。

「皆さんは元石というのを知ってますよねー」

「能力開発をしなくても能力があるというあれですか？」

小萌は何かを説明しようとして、原石とは何かを聞いた。

「はい。その二人は間違いなく元石それなんですよー。しかも義弟ちゃんの方は数学界最大の難問ジグラー定義などを解いた天才なんですよー」

「『嘘だー！！』」「『…………』」

たしかに嘘だと思うだろう。上条当麻はお世辞でも頭はいいとは言えなかったからである。

だが、残念ながら本当の事であった。

「ホントですよー、ちなみに二人の能力と順位は義弟ちゃんの方が第八位『異常』アブノーマル義妹ちゃんの方が第九位『過負荷』マイナスですー」

能力名からは、何が何だか分からないような名前であった。そしてそれが限りなく正しかった。

「では、授業を始めまーす」

「……………はい」「……………」

そして、ちゃっかり授業を始める小萌であった。

そんなこんなで学校が終わり……

「さてと……」

学校が終わり、すぐに帰ろうとする当麻。

「カミヤンどうしたんだニヤー？」

「ん？ああ二人を迎えに行くんだ、早くしないとどんな被害があるかわからないしな・・・」

「後半物騒になってるにゃー」

土御門と当麻が何かを話している内に、周りには人だかりができていた。

「まあ、早く行くわ、じゃあな」

「まて（ガシツ！！！！）」

そう当麻が言くと土御門が腕を握り。

「何だ？」

何か嫌そうな顔をしながら聞く当麻。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺も（私も）行く！！！！」

ああ、やっぱりと言うような顔をする当麻であった。

そして

「はあ、不幸だ・・・」

そう、彼は今不幸だった。

「人に会うなり『不幸だ』とは何よ！！！！」

破壊衝動しかない、糞坂糞琴は冗談で、御坂美琴がそこにいた。

「今、お前にかまってる暇無いんだ。あとにしてくれ」

「いっばいかまってる人いるじゃない！！！！」

「これは勝手についてきてるんだ!!!」
そうこう言い合っている二人であった。

そして

「何でついてきてるんだよ!!!」

「悪い?」

糞琴は・・・美琴は自分が正しい事しているっと言つような顔していた。

「悪かないですけど・・・」

もういや。というような顔をしながら答える当麻

「じゃあいいでしょ?それより」

いやな予感を、感じながら聞く、当麻。

「その用事とかが終わったらわたしとしようぶしなさい!!!」
戦闘狂かよ。と言つようなことを言つみこ・・・糞琴

「義弟か義妹かと戦え」

「どうしてよ?」

めんどくさそうに答える、当麻に納得がいかないというような顔をする糞琴。

「カミヤンの義弟と義妹はレベル5なんだニャー、しかも元石だぜい」

「はあ!?そんなわけ・・・(チラッ」

「ここら辺にいるはずなんだが・・・」

そう言いながら、あたりを見回す当麻。

「だーかーらー。私は悪く無いって言ってるでしょー!」

「嘘おっしゃいまし、ではあなたの持つてるその凶器はなんですか!?!」

ん?と言うような顔をしながら、言い争っているところを見る当麻。

「あ、いたいた、おーい狂こつちだー」

そう言いながら、大声で叫ぶ当麻。

「ん?あ、糞兄貴遅い!!!」

「最初からそれかよ・・・それより乱は?」

そこにいたのは、可愛らしいというような言葉がよく似合うような、容姿の少女がいた。

「そこにいるじゃん」

「・・・ひどい」

と言いながら、現れたのは、黒髪、黒眼の少女のような容姿をした男の子が立っていた。

だが、なぜか白衣を着こんでいたり謎の姿をしていた。

「あ、悪いでも『知られざる英雄』使ってなかったか?」

しかし当麻は謎の能力名を言っ、乱という少年に聞いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!?(ビクッ」「」「」「」「」「」「」

「

(どういうことだ?気配すらなかったぞ?)

土御門だけが違うような反応をしていたが、他は全員がびっくりしていた。

「うん使ってた」

乱の言葉に、気づけるわけないだろそりゃと言いながら頭をかぐ当麻。

「待つてくださいまし、あなたはこの二人の兄なんですか？」

「ああ、そうだが？何か？」

当麻を呼びとめる黒子、それになぜかいやそんな顔をする当麻。

「ちょっと、来てくださいまし」

そして、やっぱりか。と言うような顔をしながらついていこうとする当麻だが

「どうしたのよ、黒子？」

「いえ、お姉さまたいしたことでは・・・」

それと呼びとめる糞ゴミ

「なにかあったのね」

「・・・解りました、皆様、来てくださいまし」

そして、みんながそろそろとついていく。

それが、間違いだとも気がつかずに・・・

そして連れて行かれたところにあつたのは・・・

「ねえ、何もしてないでしょ？」

「そうだよ、まったく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

みんなが、その光景に絶句していた。

「なあ、狂？乱？」

「なに？」

何と聞き返す二人に、当麻は頭を抱えながら言った。

「人が壁とかに巨大螺子で体に刺さりながら張り付けられてるのが何でもないわけないぞ？」

そう、そこにあつた光景とは惨殺光景であつた。

「どうして？私はただナンパされていらついたから、そこら辺の通行人A B Cで憂さを晴らしたでけだよ？そもそも外傷なんてないじゃん」

わけのわからない事を言う、狂に黒子は、

「嘘おつしやいまし！！！これの・・・ど・・・こ・・・が・・・？」

「・・・は？え？どうなつてるの？・・・皆治つてる？」

今かれらは驚愕してる。それもそのはず、さっきまであつた事実が《無かつた》事になっていたからであつた。

「まあ、これが義妹の能力の一端だ、これが本質だとは間違つても思つなよ？」

「「これから関わるな！！！」とは言つても、二度とかかわりたくはないだろうけどね（笑）」

みんながキョトンとしながら、関わるなと言う二人に頭を抱える当麻。

そして、あからさまにおかしい義兄妹が学園都市にやってきた。

・
・
・
いや、来てしまった？

義兄弟が来た（笑）！！！！当（笑）じゃねーよ！大問題だよ！死活問題だ！」

読んでくださってありがとうございます、どうでしたか？

やっぱりぐだぐだでしたか？駄文ですがよろしく願います！

誤字脱字の報告、感想お待ちしております！！！！

9 / 23 大幅修正

作者はアンチ美琴（前書き）

ＨＡＨＡＨＡ、やっぱり評価されて無かったか、わかってはいたが
少し悲しいい．．
では本文です

作者はアンチ美琴

とある繁華街

当麻SIDE

「じゃあねー、どこ行けばいいの？糞兄貴？」
狂は何でいちいち糞をつけるんだ？

「とりあえず、しばらくは俺と一緒に暮らしてもらう」
母さんから言われてるんだよ・・・

「「えー、やだー」」

「なんだよ二人ともあからさまにいやそうな顔して！」
いやほんと傷ついたわ

「とりあえず、これは母さんに言われも「待ちなさい！！！」た・
事？」
なんだ？ビリビリの奴？

「あんた達、私と戦いなさい！！！」
戦闘狂力よこいつは！！！！さっきのあれを見て戦いなさい？ふざけてる、ここはとりあえず・・・

「ビリビリ、お前精神病院行った方がいいぞ」
「私には御坂美琴っていうちゃんとした名前があるんだー！！！！それにとこもおかしくないわ！！！！」
いや確実におかしいだろ

「そもそも、誰と闘いたいの？えーと・・・自意識過剰ちゃん（笑）」
「おいおい、あながち間違いでもないけどな」

「どうしてそうなるー！！！！戦いたいののはあんた達二人のどっちかよ！！！！」

あーあ、やちゃった

「じゃあ、私でいいよね？」

よりも寄って狂か・・・ビリビリ死ぬなよ

「いいは、じゃあ場所を変えましょここじゃあ被害が出るは」
駄目だこいつ確実におられる

「なあ、ジャッチメント風紀委員この戦いは大目に見てくれないか？」
そう大目に見てくれないとやばい事が起きる

「白井黒子ですの、まあいいでしょう周りに被害が出ないのであれば・・・」

こいつなかなか優秀だな、まあさっきの惨事を見てここで止めたらここでやり始めるとでも思ってるんだろうけどな

・・・大当たりだ

「じゃあ、場所は・・・」
どこにするつもりだ？

「お姉様、場所でしたらジャッチメントの練習場をお使いください、レベル5同士の対決ならばあちらも快く貸してくださるはず」
「じゃあそつするわ」

ホント白井は優秀なんだなおそらくこれ一万が一に備えて何だろうが……

「じゃあ、日時は？私は今からでもいいわよ？」

本気で大丈夫なんだろうが、タイムセールに間に合わなくなるからやめてほしい

「そう、じゃあ今からでも大丈夫？黒子？」

大丈夫なわけないだろ

黒「大丈夫ですよ、今さっき使用許可をもらいましたの」

はやっ！ホントに優秀なんだな・・・

美琴SIDE

たしかにあの二人は異質だけど決して勝てない相手ではないと思うは、さっきのはおそらく幻覚系だといえは合点がいくし、それならいくら対策がないわけではないしそうしたら勝てない敵ではないは、そう言うてけば十分に勝てる！！！！

え？どうなってるの？私死ぬの？

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ

「どうしたの？自意識過剰ちゃん さっきまでの威勢はどうしたの？」

死神が何か聞いてきた

「ねえ、自意識過剰ちゃんもしかして勝てると思ってたの？ルールでの勝利条件である腕章これを奪い取れるとも思ってたの？順位が上だから勝てるとも思ってたの？レベル5が貴重だから殺されないと思ってたの？まさか私が可愛らしいから？」

何を言ってるの？もういやだ早くこの腕章を奪ってよ・・・お願いだからさ

「まさか、自分は死なないとかサントさんみたいな事思ってたの？」

え？なに？この螺子？私に突き刺さってる？え？え？え？ほんとに死ぬの？

「甘えよ。」

S I D E O F F

ガツ 美琴の頭に螺子が刺さった否螺子込み貫いた

「この腕章もらってくね、あ、あと」

何の悪びれもなく腕章を美琴から奪っていく狂。そして何かを言い残したようにこう言った

「・・・が、」セリフ「その甘さ、」「嫌いじゃあないぜ（ビシッ！）」
なぜか良い台詞を言った狂は指を鳴らし理解できない否理解したく

ない現象を起こした

嘘のように先ほどまであったはずの美琴の傷が治ってる

否

《無かった事》になっていた

作者はアンチ美琴（後書き）

どうでしたか？やっぱり駄文でしたか？評価お願いします
美琴に何があったかは次の話で詳しく書きます
最後に・・・美琴死ね

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

闘いの行く末（前書き）

評価がついてるー！！！！やったー！！！！ありがとうございます！！！！

ではまえの話で自意識過剰（笑）ちゃんに何があったか書きます

闘いの行く末

当麻SIDE

「どうして帰らなきゃいけないんだニヤー？」

「そやで、レベル5同士の戦いをみすごさな、あかんのや？」

危険だからだよ、今こいつらに帰ってもらおうよう説得している

「危険なんだよ」

「んなもん重々承知や!!!」

「さっきの地獄絵図がもう一回見たいのか？」

いや、体験してみたいのかだなこれは・・・

「すみませんでした！今すぐ帰ります！！」「や」と帰った、これである程度は被害が減ったか・・・な？

「あの者たちを帰らせていただきありがとうございます」
黒子はそつげなく感謝の気持ちを言うが内心とてもホッとしているようにも見えた

「いいさ、誰も友達を再起不能にはしたくないだろ」
いや、比喩でも何でもなくホントに再起不能になるかもしれないんだよ・・・

闘いがもうすぐ始まるな……でも

「なあ、白井？」

「なんですの？」

「ジャッチメント風紀委員多くないか？」

ざっと見ただけで80人はくだらないぞ

「まあ、レベル5同士の対決ともあればこれぐらいの人が集まってもおかしくないですの」

「ジャッチメント風紀委員はそんなに暇なのか？」

「アンチスキル非番の人や仕事の終わった人が大半ですの、それに警備員もいますの」

そう言われればいるな、ちなみにこの戦いはビデオに撮ってるそうだ

「あ、始めましたの」

「そうみたいだな」

S I D E O F F

最初は五分五分いや、少し美琴が押していると言った感じだった、事態が急変したのは、今まで美琴が狂におわしていたはずの傷が服を含め全て直った否《無かった》事になってからだ

「ん？どうしたの？自意識過剰ちゃん？これはさっき見てたはずだよ？」

「どうなってるのよ！それは幻覚じゃなかったの！？」

本気で戸惑う狂に対して美琴は動揺していたが今起きた現象は誰も理解できないものであった。

そして当然、これには観客（ジャッチメント風紀委員やアンチスキル警備員）も驚いていた

「幻覚？違うよ、これは因果律に関係なく全てを『一虚構（無かつ

た事）』にするそれが、『オールマイクシヨン大嘘憑き』だよ」

信じられるわけがない、そんなふざけた能力誰が信じるだろうか？
だが狂の真の能力はそんな物の比では無かった。

「くっ！！」

美琴は抵抗するため、反撃するため、何よりそこにある現実リアルを否定
するため電撃を飛ばしたが・・・

「なっ！？電撃が曲がった！？もう一回！！」

しかし、またも曲がった

「どういう事！？演算は完璧なはず！！なのにどうして！？」

「そう君の演算は完璧さ、まわりが普通ならね」

自分の演算が完ぺきであることを主張する美琴に対して狂は意味深
そうな事を言った

「どういうこと？」

美琴は乗ってはいけない、言ってはいけないそんな言葉がよく似合
う事を言ってしまった

「息苦しくない？これは『ラフフレシア荒廃した腐花』で周りの空気を腐敗させ
て、私の息苦しさは『エンカウンター不慮の事故』であなたに押し付けたんだよ」
さらりとんでもない事を言う狂であったが

「無茶苦茶よ！！！！そもそも能力は一人につき一つまでっていう原
則があるはずよ！！！！」

そう、人間の脳では『デュアルスキル多重能力』は不可能だ・・・

「？誰がこの能力が別物って言ったの？これは『過負荷』^{マイナス}を細かく分別しているだけだよ」

「~~~~っ！！！！？」

驚愕する御坂だが別だん驚く事ではなかった。

これは狂の能力『過負荷』^{マイナス}の細かな区別わけした名前だ、解りやすく言えば美琴の『超電磁砲』^{レールガン}の中にも磁力を操る、電気を作る、などの大まかな区別をさらに細かくしたようなものだ・・・

そして

「どうしたの？自意識過剰ちゃん さっきまでの威勢はどうしたの？」

あれ以来、狂のワンサイドゲームだった

美琴はもう狼狽し、観客も目をそらしているものや止めようとするもが大半でもう静かに見ている者などいなかった・・・

「ねえ、自意識過剰ちゃんもしかして勝てると思ってたの？ルールの勝利条件であるこれ（腕章）を奪い取れるとも思ってたの？順位が上だから勝てるとも思ってたの？レベル5が貴重だから殺されないと思ってたの？まさか私が可愛らしいから？」

狂はもう聞く余力さえない美琴に巨大螺子を投げ美琴の体に螺子込んだ

観客は目をそらし中にはショックで気絶する者までいた

「まさか、自分は死なないとかサントさんみたいな事思ってたの？」
言葉と同時に巨大螺子を取り出し

「甘えよ。」

美琴の頭に

螺子を

足で

螺子込んだ。

観客は悲鳴を上げ気絶するものが増えた、

しかし

闘いを止めれるものはいなかった

否

闘っているところに入れなかった

「この腕章はもらってくね。あ、あと」

狂は悪びれもなく腕章を取り勝利した後何かを言い残したように

狂「・・・が」「その甘さ」「嫌いじゃあないぜ」

いい台詞^{セリフ}を言って立ち去って行った

しかし、観客はほかの事に目を奪われていた。

美琴の傷が嘘のように治っていた・・・

少なくとも観客にはそう見えていた

闘いの行く末（後書き）

闘いのぜんぼうが解りましたか？美琴ファンの皆さんすみません。
球磨川ファンの皆さん『じゃなくてすみません
そして読んでくれた皆さんありがとうございます。
評価してくれるとうれしいです

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

は？風紀委員（ジャツチメント）に入れ？（前書き）

総合評価ニケタ突入！！！！皆さんありがとうございます！！！！
お気に入り登録5件！！！！これからもがんばります！！！！

では本編どうぞ！

は？風紀委員（ジャッチメント）に入れ？

乱SIDE

「~~~~~」

今狂はとても機嫌がいい、俺もうれしくなってくる

「おい、待てよ」

なんだ？こいつらは？

「ん？なに？」

「さっきの鬭いあまりにもひどすぎるだろ！」「そっだ、そっだ」

「

何を言ってるんだ？こいつらは？見たところ腕章付けてるし風紀委員か？
ジャッチメント

「なにを言ってるのかな？私はルール違反なんかしていないよ？」

「しらばくれるな！ルールなんかよりあれは仁義に反するだろ！」

なんだ、こいつら、ただの一面しか見れないバカどもか・・・

「どうして？あの子も私にレールガンぶっ飛ばしてきたじゃない」

「っ！だが」

言い返そうとしても無駄だこういう事に関しては狂は驚くほど頭が働く

「『だが、お前には『エンカウンター不慮の事故』があるだろう』とでも言いたいの？」

「そっだ！それに『オールフィクション大嘘憑き』もあるじゃないか！」

・・・こんなバカどもに、治安が守れるのか？

「でもあの時点では、それは憶測でしか無かったよね？誰が『不慮
カウンター
の事故』が全ての攻撃を押しつけられると言った？」
「っ！」

「誰が『大嘘憑き』が死をも無かった事に出来ると言った？」
「~~~~っ！！！」

そう、あの時点では全ては憶測にすぎなかった

「そもそもあの子から勝負を吹っかけてきたんだよ？そして“直す”
”必要もないのに私は“直し”てあげた、感謝こそすれ憎まれる事は
はしていないよ」

「ぐっ！？だが・・・」
こいつらの言いたい事が解らないでもないが、明らかに今は狂が
正しい

「まあ、私は優しいからごめんなさいと言えば許してあげなくもな
いかもよ？」
疑問形かよ

「・・・ごめんなさい」
こいつ、根はあまり悪い奴じゃなさそうだな、そもそもこいつだけ
狂に文句言ってたし

「なにを言ってるんですか！？悪いのは」
「だまれ！今は明らかにこつちが悪いんだ、いろいろすまなかった・
ジャッチメント
・突然で悪いとは思うが風紀委員に入らないか？」

は？

何を言ってるんだこいつは？

「なにを言ってるんですか！？こんな」

「二人ともレベル5だ、こいつらがいれば・・・いや、いるだけで学園都市の治安はかなり改善されるはずだ！！！」
ドヤ顔で言われても・・・

「えーっと、正気？」

そりゃそうだ、俺らを仲間にしようなんて正気の沙汰じゃない

「はつきり言って正気じゃないかもしれない」
認めちゃったよこいつ

「だが、お前らが戦力になるのは解りきってる！ああ、俺の名前を言い忘れてたな、俺は風紀委員長、筑波 玄だよろしく」

偉い人だったー！！！！いや俺も社会的地位はそれなりに高いけどさー

「・・・仕事多い？」

ジャツチメント

「いや、お前らは風紀委員に所属しているだけでいい、それから事務仕事が大半だ、現場には何が何でも、いかせん！」

「じゃあ、いいよ」

すんなり入るんだな、じゃあ俺も

「俺もそれならいい」

「本当か！ありがとう！本来は試験とかがあるんだがまあいいかい
いいのか！？まあ楽でいいけどさー」

「いや、さっきの事はホントにすまなかった、頭に血が上ってたんだろうな・・・」

ホントにこいつ、いい奴だな

「いや、いいよ、よくあるしね」

「えっと、あの・・・」

ん？ああ忘れてたその他大勢の奴ら

「あ、ごめんね影薄いから、忘れてたよその他大勢の皆」

「ははは、じゃあ明日から頼むな！えーっと？」

なんか爽快な笑顔がうざい

「私は上条 狂」

「俺は上条 乱」

「二人合わせて狂乱だから」

うん、拾われたときに二分もかけて考えた決め台詞だ

「ん？上条 乱？もしかして、ジューグラーの定理を解いた・・・」

「そうだが、それが？」

「いや・・・びっくりしてな・・・」

そりゃ、そうか、ちなみに俺はここには学生としてそして研究者として招かれてる事を言つとさらに驚かれた

「おーい、乱、狂、帰るぞー」

「「狂乱だっつってんだろーが！ー！ー！」」

「ごめんごめん、じゃあ帰るぞ」

まあ、こうして風紀委員になった俺たちであった

当麻SIDE

「は!？」

「何回も言わせるな、糞兄貴、風紀委員ジャツチメントに入った
えっと、こいつらが？」

「しかも、風紀委員長の推薦で」
大丈夫か!？風紀委員長!

「これにハンコとか押して」
紙にハンコをおせと催促する狂だが

「えっと、お前らホントに入るのか？」
「ああ、仕事は事務だけだから心配するな」
ああ、ならいいや。乱はこういうのでは嘘はつかないし

「ほいっと」
これでこの二人が少し常識がつくといいなと思ってる

「じゃあ、早く寝ろよ、明日転入式なんだろ？」
レベル5しかもそのうち一人がとんでもない天才とあらばこれぐらい当たり前になってきた・・・

「俺は『アリバイブロック腑罪証明』を使えばいいんだが」
「そうか、じゃあ狂と一緒に登校しなくてもいいだな」
「早く寝よう」

ちよろい、ちよろい、ん？

「なにベッド使ってたんだ！？」

「寝るからに決まってるじゃん」

なに聞いているんだって顔でこっち見るんじゃないやねえよ！？

「俺は！？俺はどこで寝るんだ！？」

「洗面所で寝れば？」

酷いっ！！！！これくらい普通だろ的に言われたし！！！！

そんなこんなで洗面所で寝る羽目になった私こと上条当麻であった

は？風紀委員（ジャッチメント）に入れ？（後書き）

見てくださってありがとうございます

いやー、思いつきで書いてたらこつなつた。

ああ、次からどうしょ・・・

誤字脱字の報告、感想お待ちしております（評価もしてください！
！（おねだり）（

乱先生の武器講座（前書き）

今回は乱の武器解説です

乱先生の武器講座

武器

『スーパーボール
超弾道弾』

凄まじい反発力をもったスーパーボールだ、
鉄板（5ミリ）なら貫通するぞ
定価80万（1個）

『炸裂爆弾 シンデレラ
灰かぶり』

まあ、その名の通り炸裂爆弾だ、
核シエルターとまではいかなくとも大抵の壁は粉碎できる
定価50000円（1個）

『巨大螺子』

狂の使ってる螺子だ、
親からもらったおこずかいで買ってるぞ（月40000円）
定価20000円（1個）

『ロケット花火』

独自の爆薬を使ってるぞ（国の規定をはるかに上回る）
先に鉄製のとげがあり当たるとかなり痛い（とゆうか突き刺さる）
まっすぐに飛び対象に当たると爆破する（当たり所が悪ければ死ぬ）
定価30000円

薬品

『ノーマライズ・リキッド』

体の構造を強制的に普通に戻す特效薬だ

能力開発をしたものにしか効かないためモルモットでの実験ができず
にいた
副作用として体中に激痛が走る。

乱先生の武器講座（後書き）

これからも次々更新していきます。

10/10日薬品追加

転入式（前書き）

こんにちは復活しました
では本編どうぞ

転入式

狂SIDE

今私達は転入式を行ってる、

乱が今から何か言う（毎回転入するたび発表している）

お、始まった

「喜べ実験台ども、明日から俺が時間割カリキュラムを組んでやる」 ザワザワ

「ふざけるな！俺らが実験台どもだと！？俺らは生徒だ！お前がどんなに偉かるうが人権の侵害だぞ！！！」

何か騒いでるな

「なにを言ってる？お前らは基本的に学園都市で能力開発こしという実験に加担している実験台じゃないか。それを俺はさらに効率化してやると言ってるんだ。ありがたく思え」

・・・いつもど通りの事言ってるね、でもあんな事どうして顔色一つ変えずに言えるんだろ？

それから結構ざわついてるね（いつもの事だけど）

おっと、乱が言い終わったみたい次は私だな。

SIDE OUT

乱SIDE

言い終わった、毎回毎回どうして実験台どもは、ああも騒ぐんだか、次は狂か、・・・俺は毎回発表しているが狂は今回が初めてじゃな

いか？

どんな事言っただろ、楽しみだ。

お、始まった

「えー」「モブキャラのみなさんこんにちは。」

グシャッ！！！まさにこういう効果音立てて潰れたな

・・・うーん、どうしてあれだけの言葉で人の心をへし折れるんだろ？

「どうしました個性なきみなさん！」

ベギッ！！！今度はこんなおとかな？

「怪我はありませんかその他大勢のみなさん！」

ゴスッ！！！

何なんだこの効果音は！？何となくでこうなったぞ！？

「気分が悪いのなら早く帰った方がいいですよもう出番のないみなさん！」

ドサッ！！！

結構の実験台ヒトが倒れたぞ！？これじゃあ研究が・・・

「もうやめてくれないかな？狂君？」

言われてもいない、校長までふらふらになってるよ・・・

いやでも、小等部から高等部まであるこの長点上記学園のほとんどの生徒（3人ほどたっている）を言葉だけでこうもするとは・・・
凄いな・・・

SIDE OUT

S I D E O F F

とある教室

「ねえ、あの転校生このクラスの来るんだって！」

「「「「「「「「「「「えっ!？」「「「「「「「「「「」

「とはいつてもあの女のほうだけらしいけど・・・」

自信名下げに告げる生徒であつたが、狂の方がどう考えても危険ではある

「いやさ、そうでもまずくね？」

この生徒達はさっきの発表であの二人の異常さを知ってしまっていた否、知ってると思い込んでいたのだ

49

「だからさ、懲らしめない？」

慎重に、慎重にこう言い放つたこういう印象を与える小さいがはつきりと聞こえる声だった

「え?・・・そうだね・・・」

「そうしようぜ、あいつがいくらレベル5でも俺らがまとまればどうにかなるだろうし」(そうだね(やろうぜ(ガヤガヤ

ここで行われているのは言わなくとも解るだろうが、いじめの相談だ。

彼らの中にはレベル4もあり勝てると思うのも自然な流れだった。そしていじめが決行された。

内容的には座る予定の机などに落書きなどをするものである

誤算があるとすれば、それは

乱の異常性否過負荷性を甘く見ていた事だろう

SIDE OUT

とある新任教師SIDE

今日から転入してきた生徒（しかもレベル5）を受け持つことになりました！

私なんかで大丈夫かな？

あ、そんなこと考えていたら教室についてしまいました、何かあったらその時はその時でいいですね？

まずはいつもどおり

「みんなー出席と・・る・・よ？」

え？どうなってるの？

SIDE OUT

SIDE OFF

新任教師が入ってきて見た光景は、
血だらけになっっている生徒達とその中で落書きのされた机に座って
漫画を読んでる狂の姿だった。

「あ、先生遅ーい、待ちくたびれたよ」

狂はこの情景の中あまりにも普通に教師に話しかけた

「まったく、乱は特別に研究をするための部屋をもらってそこでわ

けのわからない事言ってるし、クラスに来てみれば机はこれだし」
教師を無視して勝手に何かを愚痴る狂であった

「あの・・・これはどうして・・・このクラスの生徒たちはどうしてこうなってるの？」

か細い今にも消えそうな声で教師は狂に問いかけた。

「え？そんなの私の能力の一端である『スカーデッド致死兵器』でやったに決まってるじゃん」

当たり前と言わんばかりにさらりと狂は自分がやったと言った。

「どうして！？どうしてこんなことやったの！？」
教師は驚き怒鳴ってしまったがこの行為を誰が否定できよう。否、少なくともここにいた

「あの机見たでしょ？いじめられたからだよ」
そう狂が・・・

「それでも、それでもやりすぎですよ！！！」
しかしひるみながらも十人中十人が賛同するセリフを言った

「おいおい、私はいじめられたんだぜ。しかもクラスメイト全員にだぜ。どっちの方がやりすぎかな？」

しかしそういう枠には自分は入らないそう自覚している狂にはあまりにも無力な言葉だった

「っ！？でも、暴行はいけません！！！」

「私は精神的に暴行を受けたんだぜ、差別するなよ」
平然と自分は被害者だと主張する狂に対し教師は

「っ！し、しかし・・・」

何も言えなくなり、その場に立ち尽くし狂は

「何か言葉が見つかったら教えてね、その間漫画でも読んでるから」
平然と教師の今考えていることを漫画を見ながら待つと言った。

ちなみに一時間ほどたってこの光景を見あきた狂の気まぐれによつて外傷を無かった事にして驚いてる新任教師を見て笑ったり、まだ倒れているクラスメイトを見て笑ったりしていた。

ちなみにこのクラスの授業がかなり遅れたそうな

転入式（後書き）

どうでしたか？やはりわけがわからなかったですか？
感想お持ちしております

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

七月十九日（前書き）

はい、投稿します、

総合評価が上がってうれしいです！！

ちなみに美琴による電化製品が駄目になるといふイベントはありません

理由は本文で

七月十九日

当麻SIDE

狂と乱は長点上記学園に入学した、それは必然的に“長点上記学園の寮”に入るはずだった、

そうだったんだ、母さんが、あの二人を知り合いもないところに入れるなんてかわいそうとかいって、運良く（俺にとっては運悪く）俺の住んでる部屋の隣が開いていて、今そこに二人は寝泊まりしている。
ホントに帰って荷物置いて寝る以外に使わなく飯なんかはここで食っている

今日は夏休み前日、

大抵の学校は午前中授業だけで済み大抵の学生はそのあと外で遊ぶ、俺も狂と乱と一緒にファミレスに行くことになった。
今、俺はステーキセットを待っていた。

「ちょっとお手洗いいくね」

毎回思うが狂は変なところで綺麗な言葉で言うんだろう？

「ん、解った」

乱は炭酸飲料を飲みながら答えた。とゆうかこいつ炭酸飲めたんだ。
・

「解った、早く行って来いよ」

「お前に言ってるねーよ糞兄貴」

本気そんな言葉で言われたけど、いつもの事だ、いつもで済ましている俺が悲しくなってきた

「ねえその彼女」

「俺らと遊ばないかい」

ん？ナンパか？いやでも、さそってるの……ゾクッ！！！！

「殺すなよ、乱？」

「解ってる、死などには逃がさない」

本気、さっきの狂の言葉とは比べ物にならない。しかも目が暗くなってるし

「俺が何とか言ってやめてもらっからさ、な？」

「……解った」

ほ、よかった、ではまず

「遅かったじゃないか狂、乱が待ってるぞ」

「なんだデメエ？」

あからさまにうつつとうしそうに聞いてくるがお前たちのためなんだぞ

「そいつの義兄です」

「乱は？糞兄貴」

俺への感謝はないのか。まあ当たり前か……

「あつちで待ってる」

「おいおい、兄ちゃん人のナンパを邪魔するのか？」

邪魔する気はないが助ける気はある

「お前らがナンパしているのはレベル5だぞ？」

「な！だが子供だぜ？」

子供は以外に危ないんだぜ？とゆうか乱には言っなよ絶対に

「さつき義弟の方が殺氣づいていた、だからやめとけそうじゃないと」

「そうじゃないと？」

どこからともなく、“日本刀”が飛んできた。

「これに当たるかもしれない」

「「すみませんでした！！！俺らが調子乗っていました！！！」」

全力疾走で逃げていったけど代金はらわずに逃げていったぞ

「氣をつけてかえれよー」

そんなこんなで今俺らは注文した料理フリーズドライを食っている

ふう、うまいうまいフリーズドライでもこんなにうまいんだな

「なにうまそうに食っている、しょせんフリーズドライじゃないか」
「気持ちの問題だよ」

サラダしか食べない奴に言われてもな

「私は乱と一緒に食べるものなら何でもうまいよ」
そんなこんなで帰つてると

「お、白井どうしたんだ？」

「っ！第九位」

苦々しげに狂をにらんだ

「なに？あなたも私を逆恨みするたち？」

逆恨みか・・・

たしかにこれは逆恨みだな・・・

「いえ、先ほどのご無礼は許してください、何せお姉さまが入院することになったものですから」

・
・
・
・

は？

七月十九日（後書き）

短い！！！予想以上に短い！！！

明日詳しく書きます！

許してください、

お願いします

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

七月二十日禁書目録編その一（前書き）

昨日投稿できませんでした、すみません。
では本編です

七月二十日禁書目録編その一

当麻SIDE

とある学生寮

「はあ」

白井から聞いた話によるとビリビりは死に直面しその時の光景を何
度も思い出しては能力を暴走させているそうだ。

今は精神科に入院していて傾向はいたって良好なのだが・・・

「方法が投薬による記憶制御か・・・」

それしか方法がないのは解っているが・・・

「ビリビりの性格上もう一回狂や乱に勝負を挑みそうだな・・・」

そう、どれほど記憶を消したが解らないが少なくとも狂に惨敗した
事は覚えていないだろう。

「ああ、もうやめだやめ！そう今日から夏休みだ成績も赤点じゃな
いし夏休みを満喫できる！宿題で解らないところがあつたら乱に聞け
ばいいあいつの教え方は上手いし、そもそもあいつが高校生程度の
問題が解らないわけがない！」

なんか自分で言っただけで悲しくなってきた、弟を頼りにするなんて・・・

その日の朝

プルル、プルル

ん？なんだ？携帯が鳴っている？

「はい、もしもし」

「上条ちゃん。出席日数が足りないから補修です」

・・・

は？え？この声は小萌先生？

「どういことですか？」

「どうもこうも上条ちゃん不幸に不幸が重なって学校に来ない日が多かったじゃないですか」

そう言われればそんな気が・・・

「解りました・・・何時からですか？」

「二時間後ぐらいからです、ようは、八時からです」

「あのー、あなたは朝の六時に人の携帯に電話をかけたのですか？」

「そうでもないかと上条ちゃんの事だから不幸が重なって遅れて来ますし、もしかしたら来ないかもしれないじゃないですか」

うゝ 否定できない

「解りました行きますよ」

「解りましたー、じゃあ切りますねー」プツ、ツーツー

投げやりだな・・・てかあの先生は朝の六時に出勤しているのか！？
でも、やっぱり

「不幸だー！！！！」

「うっせー！！！！」

狂と乱には解らねーよこの気持ちは！！！！

SIDE OUT

小萌SIDE

「今頃上条ちゃんは『不幸だー！ー！』とか言ってるんでしょっね」

SIDE OUT

SIDE OFF

「なあ、乱？」

「なに？」

「朝ごはんを作る手伝いしてくれないか？」

「朝から野菜のフルコースが食べてもいいならいいが」

「すみませんでした」

朝の一連のやり取りをした義兄弟だった

それから数十分後

「できたぞー、今運ぶからなー」

朝ごはんは食パンが各二枚づつとヨーグルトあとは飲み物と簡素なものだった

「はい、落とさないように気をつけてよー」

「落としたら『致死兵器^{スカーデッド}』で血祭りにあげてやる」

「おとさねーよ」

ベギッ！ー！そんな音を立て何かを当麻は踏んだ

「ん？なんだ？この音は？」

恐る恐る足元を見た当麻の足元には、

大破したクレジットカードがあつた。

「・・・不幸だー!!!」

本日二回目の不幸だーを言う当麻に対し狂と乱は

「ぎやははははははは！！！面白い！腹いてえ！ひーひー腹痛い」
狂は大笑いし、床を叩きぜーハーぜーハーと呼吸を乱していた

（何で兄貴はあんなに大きい声を出しているのに食器を落とさずに入れるんだろ？）

乱はどうでもいい事を考えていた

そんなこんなで朝ごはんを食い終わった兄妹達は

「うつ、と、とりあえず、天気もいいし布団を干そう」

「ひーひー腹痛い、朝ごはん吐くかも」

（何でだろ、兄貴にこれからものすごく不幸な出来事が起こるような気がする・・・）

当麻いまにも泣きそうなかを押し、狂は本当にはきそうな顔をしながら吐くといい、乱は今後の予想をしていた

「空は青いのお先は真っ暗」

（鬱病患者みたいな事言ってるな）

「糞兄貴にお先が明るい事なんかあるわけないじゃん」

精神医学にも精通している乱がこう思ったが次に狂が言った事でそれもそうかと考えを明後日の方向に投げ捨てた

「うるさい、つか夕立とか降らないよな？」

「大丈夫、ツリダイアグラム『樹形図の設計者』でも今日は夕立は降らないって言うし、そもそも俺の『天気予報』でも・・・」

「どうした？」

何かを考え始めた乱に当麻はこの先自分が不幸になるのかと思い始めていたが

「今度から『天気予報』とかの演算系能力を『ガイアダイアグラム地球の設計者』って呼ぶことにした」

「……（それってただ単に作者が名前を思いつかなかっただけじゃ）」

さすがにこれには狂でさえ悶絶した

「ま、まあ布団を干そう……」

「解った」

聞かなかった事にしよう、二人で暗黙の了解をし布団を干そうとし、扉をあけるとそこのは

「？」

そこには白い服を着た銀髪碧眼の女の子がいた

「はあ!？」

「どうした?……何こいつ?」

「うわあ、べただー」

「お前らはどうしてそう平然と居られるんだ!？」

たしかに平然でいられるわけがない光景であった

「お」

「乱何か言ったら翻訳してくれ」

「解った」

語学力がバカみたいに良い乱に翻訳を頼む兄の姿はあまりにも頼り

ないものに見えたが

「おなかへった」

「だってさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シスターは翻訳するまでもなく日本語をしゃべったのであった

七月二十日禁書目録編その一（後書き）

はい、皆さんこの人が誰だか分りましたよね？

アンケートらしきものをとります。

内容は乱と狂が使う『アブノーマル異常』と『マイナス過負荷』です。

能力名と効果を書いて教えてください、お願いします。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その二（前書き）

学校が早く終わったので投稿できました。
読んでくれる皆さん本当にありがとうございます。

では本編です。

七月二十日禁書目録編その二

当麻SIDE

とある学生寮

「おなかへった」

「だつてさ」

「・・・・・・・・・・」

俺は（狂も）自分が思っている以上にバカで乱が訳す必要もないと思つた外国語を空耳アワーよろしく日本語に変えたのだと思つた。

「おなかへった」

「だとさ」

「・・・・・・・・・・」

駄目だ、熱がある、そうだ、そうに決まつてる、今日はおとなしく寝よう。

「おなかへったっていつてるんだよ！？なに二人とも立ち去ろうとしてるの！？」

「一応言つておくが、こいつのしゃべってるのはれっきとした・・・日本語だ」

「でも外国人だぜ！？」

「白人の日本人なんかざらにいる」

そうなのか？

「一応イギリス人なだけどね」

そんなのはたいした問題じゃないと思うのだが・・・

「ナニ？ひょっとして、アナタはこの状況で自分は生き倒れですかおっしゃりやがるつもりでせう？」

「倒れ死に、とも言っ」

「兄貴、日本語こいつより間違ってるぞ」

解ってるよ

「何かおなかいっぱい食べさせてくれると嬉しいな」
断ったら悪人の様な気がするな。

「あー、朝ごはんの残りでも食うか？」

「ありがとうございます、そしてどこにあるの？」
食欲旺盛だはこのシスターさんは・・・

「待つてろ、今テーブルに運ぶから」

「わかった」

聞きわけは良かったか

「まずは自己紹介しなきゃね」

「・・・いや、まず何であんなトコに干してあったのか・・・」

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ？」

「誰がどうみても偽名じゃねーか！」

「うわっ、ネーミングセンスわるっ」

「目次？目録？どっちにしても変な名前だな」

駄目だこいつら、本当だめだ。こういうのを残念なこっけ言うんだろっな

「見ての通り教会の者です、ここ重要。あ、バチカンじゃなくてイギリス清教の方だね」

「意味わかんねーしこつちの質問は無視かよ!？」

「チッ!あのいけすかねー化け狐のどこかよ」

「何言ってるの?乱」

狂に先に聞かれたが本当に何言ってるんだこいつは?

「何もかにも、イギリス清教、最高司教ローラシチュアート、だ
いぶ前に奴の住処に科学的な防護装置をつけるって依頼が来てその
時に会った、まったくあいづは本当に化け狐だ、『感受性』を使っ
たにもかかわらず何を考えてるかが全く解らなかった、でそんなと
この奴がどうしてここにいるんだ？」

いやあのー、あなたは何時の間にそんなお偉いさんと知り合いにな
っているのですう？

「きみ、すごいんだね、普通は信者でも会えないのに・・・」

「世の中そんなものさ」

そっけなく言うがたしかに世の中はそんなものだ

「うーん、じゃあ聞くけどここら辺にイギリス清教の教会ってある
？」

「無い、そもそも日本は十字教でいえばローマ正教が大多数だし、
学園都市にはまともな教会そのものがないんだ」

うわーなんか、会話に入るすぎが全くないぞこれ・・・

てかもうこんな時間!?やべ!

「補修あるから留守番頼むぞ!？」

「私のクラスも授業が全然進んでないから補修、てか学年全体が補
修」

おい!仮にも名門校だろ!?!大丈夫なのかそれで!?

ジャケットメント

「俺は風紀委員のなんかで177支部に実地研修。これは筑波でも外せなかったらしい」

・・・じゃあ、このヘンテコシスターを家においてけと？

「大丈夫、おなかいっぱい食べたしもう出てくから」
満足そうな顔で言っているが

「大丈夫なのか？」

「なんなら、風紀委員の支部で預かることぐらいならできろぞ、少なくともあそこにいればお前が逃げてる奴は追っては来れないだろうしな」

・・・

は？

七月二十日禁書目録編その二（後書き）

進まない！思った以上にすすまない！

たぶん明日も投稿できます。

見てくださってありがとうございます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その三（前書き）

うう、まったくペン？が進まない、案があっても書く気がなかなか起きない。

てゆうか、七月二十日は何話続くんのだ？

そんな感じの七月二十日その三です。（・・・どんな感じになるんだろ？）

七月二十日禁書目録編その三

当麻SIDE

とある学生寮

・・・は？

え？このヘンテコシスターが追われてる？
何言ってるんだこの義弟おとつとは？

「えーと、その事言っただけ？」

マジで追われてるの！？

「言っていないが？」

こいつは何でそんなこと聞くんだ的に首をかしげてるんだ？

「じゃあなんでこいつが追われてるなんて解ったんだ？」

当然俺は聞いた、狂は学校に行く準備をしているけど・・・

「一目両全じゃないか、教会の者がどうしてあんなところに干されてたのか、それは上から落ちたからに決まってる、妥当なところは屋上だろうここ七階だし」

そう言われてみればそうだな・・・この学生寮は八階建て、屋上から落ちたことになる・・・だけど

「どうしてそこから、追われてるになるんだ？」

「そんなのこいつがシスターだからに決まってるからじゃないか」
は？どういうことですか？

「聖職者は基本的に自殺なんかしない、だとしたらどうしてあそこに引っかかっていた？しかもここ、学園都市で？」

うーん、確かに不思議だ・・・

「しかも気絶していたにもかかわらず、見たところ傷一つないそれどころかベランダには何かを吐いたを後さえない、例え一階だろうと落ちれば何かを吐くはずだしその衝撃で気絶するとなるとなおさらだ、大方衝撃吸収材でも着こんでいたんだろう」

頭が痛くなってきた。こいつはどうしてこつも小難しい話をするんだ？

「じゃあ、なぜ衝撃吸収材なんか着こんでいたんだ？襲われる事を想定していたと考えるのが普通だ、いくら学園都市でも銃刀法ぐらいはあるしな」

服の中に日本刀やら実弾の入ったマシンガンやらを隠し持つてる奴が言っても説得力無いぞ

「じゃあなんで気絶してたの？衝撃はなかったんでしょ？」

たしかに・・・うおっ！？何時の間にいたんだ狂！？

「びつくりしたんじゃね？」

そこら辺は投げやり！？

「大方正解かな？たしかに追われてるけど、衝撃吸収材？そんなの着こんでないよ？私が無事だったのはこの『歩く教会』のおかげだと思っ」

歩く教会？

「歩く教会？能力の名前か？」

さすがに乱でも知らないのか・・・

「うっん、これは防護結界」

・・・は？結界？ああそうか邪気眼かそれなら全部名得できる

「防護結界？空力使い（エアロマスター）の派生能力かなにかか？
そういう見方は俺にはできないよ

「うっん、魔術」

・・・はい邪気眼けつてーい

「魔術？・・・そうか、あの化け狐の頭にあつた謎の方式はそれか・
・・・」

何マジにしてんだ！？この義弟は！？おとつと

「否定しないの？」

「何もかにもを否定していたら発見などあるものか」

「え？魔術？使えるの！？見せて！」

何かを考えながら言う乱ときょうみ心身に聞く狂を見ていて俺がおかしいような気がしてくるのは俺だけか？

「えっと、私は魔力はないからできない」

テレビで駄目超能力者を見てる感覚だ・・・

「で、その『歩く教会』とやらはどんなものなんだ？」

「これは『教会』として必要最低限な要素だけ詰め込んだ『服の形をした教会』なんだよ。布の織り方、糸の縫い方、刺繡ぜったいの施し方その他もろもろ全てが計算されてるの、その強度は法王級だよ

自信満々に『歩く教会』の自慢をしているが確認す者がいないからな、やっぱ手の込んだ遊びでもしてるんじゃないのか？このヘンテコシ

スターは

「えい！！！」

「おい！？狂！？何してるんだ！？」

「ナニって、今の説明を確かめるために螺子を投げただけだよ？」
未曾有の少年犯罪になるぞそれ！？

「大丈夫だよ、ほら」

そうい割れてインデックスの方を見ると、床には狂の投げた巨大螺子が転がっていた

「ほう、じゃあさっきの説明は本当だったんだな。その法王級ぜったいな強度については」

「ナニお前らそんなに冷静なんだ！？つてもうこんな時間！？やべ！？行ってきます！！！！」

「あ、ホントだ私も行かないと」

急がないと補修の補修になってしまう！

「で、どうする？風紀委員の支部に保護でもしてもらうか？」
ジャッチメント

「ううん、私ここには一応不法侵入だからまずいかも」

「そうか、じゃあ、達者でな」

お前本当にジャッチメントなのか？

「うん、君もね。あと最後の言葉、爺くさいかも」
「わざと」

七月二十日禁書目録編その三（後書き）

うわー！最後がものすごくグダグダだったー！

しかも、魔術のワードは出たのに魔術結社の単語が出ていない！どうしよう！

ちなみにインデックスは戻ってきますよ、『歩く教会』の効力も実は狂がなかった事になっている設定ですし。じゃあ、また明後日とか。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日超電磁砲編（前書き）

いつの間にか総合評価が三ケタにいつてた！
これも皆さんのおかげです！

では本文です。

七月二十日超電磁砲編

SIDE OFF

とある商店街

「へー、今日レベル5の御坂美琴さんに会えるんだー」

「はい！今日念願かなってあの常盤台中学の御坂美琴さんに会えるんです！」

目をキラキラ輝かせているのは初春 飾利この街の治安を守る風紀
チメント
委員の一人である

「やめときなよ、きつとレベルをかさに人を見下すようなお嬢様に決まってるよ」

そしてもう一人いるのが佐天 涙子この街の一般の学生だ。

「いいじゃないですか、お嬢様」プルルル

「電話なってるよー」

お嬢様の良さを語ろうとしたのを逃れられた佐天は内心ホッとしていた

「あ、はい。もしもし初春です、あ、白井さん、え？もう一人来るんですか？解りました、ではファミレス前ですね。今すぐ行きます」
「なんだってー」

「え？あ、はい、えーともう一人来る事になったようです、あ！佐天さんも行きましょうよ！」

「え？いいよ私はっ！？」

「じゃあ行きましょう」

「ちょ、人の話を・・・」

とまあ、和やかな話をしているのは初春飾利と佐天涙子で今から御坂美琴ともう一人のレベル5に会う事になった哀れな少女たちだった。

とあるファミレス前

「えー、お姉さまこちらが初春飾利、ジャッチメント風紀委員でわたしのバックアップをしてくださるんですの、でこちらが・・・」

白井 黒子が初春の説明をし終わってもう一人の説明をしようとしたが初対面だったため言葉をつぐんでしまった。

「こんにちはー、初春の親友の佐天涙子でーっす。なんか知らないけどついてきちゃいましたー、ちなみに能力値は0でーす」

それに気がついた佐天涙子は自分で自己紹介を聞かれもしない能力値を言った

「さ、佐天さん」

それに戸惑う初春はゴニョゴニョ何かを言い始めたが結局何を言いたいのかわからないまま

「えーと、初春さんに佐天さん、私は御坂美琴よろしく」

御坂が挨拶をし始めた

「え、あ、はい」

佐天は予想に反してフレンドリーなことに驚きを隠せずにいた

「あ、白井さんもう一人の人はどこにいるんですか？」

「えっと、もうすぐ来ると思いますの」

もう一人来るはずのレベル5をどこかと聞く初春に対し白井はもう

すぐ来ると言っただが

「もう来てるよ」

「「「「!!!?」「」」」」

いきなりどこからともなく現れた乱に対して驚く四人に対して乱は「初めましてかな？俺は上条乱、今日だけで177支部に研修に来たんだよ本当は狂も来るはずだったんだけど補修でこれなくなっちゃった、有する能力は『アブノーマル異常』ちなみにレベルは5、順位は8位だよ」

無視して自己紹介をした。

「いつからそこにいたんですの!？」

空間移動系能力者の白井黒子は同じ能力者がレポートする際わずかだが予兆とでも言うべきものを感じる事が出来る、だが乱からは何も感じず本当にいきなり現れたことに驚きを隠せずにいた、そしてたら乱は

「いつからか、その質問に対しての回答はいつでも さ『アリバイブロック腑罪証明』
という、『アブノーマル異常』を細かく区別わけした中の一つさ」
とあまりにも訳のわからない説明をしたが

「じゃあ、やっぱり空間移動系なの？」

かろうじて物事をつなげる事の出来た美琴がそういった、今までの事を踏まえればこう断定してもよかった、だが乱の説明はそれこそ統括理事会でさえ予想だにしない説明だった

「いいや、これはレポートでもアポートでもないよ、似て非なるものさ。簡単に説明するとこれは、いつでも好きな時に好きな場所

にいられるのさ、密室でも、宇宙でも、天国でも、地獄でも、夢の中でも、心の中でも、きみたちの中でもさ」

四人は超能力で説明しようとするあまり彼の真の能力を、本質を、忘れていた、そう『アブノーマル異常』を・・・

「まあ、それはさておき、どこ行くの？服屋はいやだぜ、荷物持ちもごめんさ」

あまりにも普通ノーマルに異常なことを言い放った乱に対して四人は

「あ、え、そうですね、多少予定は狂いましたが今日の予定は私がばっちし（ガコン！！！）」

「まったく、そうよね、ここにいっても仕方ないしとりあえずゲーゼンにいきっか」

「そうですね」

「はい、解りました（うう、何かお嬢様みたいな事をできると思ってたのに）」

アブノーマル異常な方法で普通ノーマルに戻って行っただけ・・・

なんやかんだあってクレープを食べることになった一行は

「あの銀行どうして昼間なのにシャッターしまってるんでしょ？」

ささいな疑問を初春が言い終わった瞬間に防犯シャッターがバコンという盛大な音を立て爆破した。

「っ！初春アンチスキルに連絡を！それから人が有無の確認、急いでくださいまし！」

「はい、解りました！」

教本に書いてあるのか迅速に行動をとった黒子は初春に指示をする

と今度は

「乱さんはそこで待機を・・・って居ない!？」

乱に指示をしようとしたがもう居なく、乱は現場にいた。

「ジャツチメント風紀委員だ、器物破損と強盗の現行犯で捕まえる、さつさと、捕まりなこの実験台どもが」

誰がどう見ても挑発的な態度で誰がどう聞いても挑発的な事を言うており、案の定と言うべきかどう言うべきか、強盗たちは

「なんなんだ?このガキは?」

「ジャツチメント風紀委員はそんなに人手不足なのか」

「はは、ちげー、ねえ」

「おい、てめー長幼の理って知ってか!？」

相談が終わるやいなや殴りにかかって行ったが乱は

「そうか、そうか、抵抗するんだな解ったよ、じゃあ、ヒザマス「ヒザマス跪ケ」」
そう言い放った、そして強盗1は

「な!?!うごかねえ!?!どうなってるんだ!?!畜生!?!!?!」
跪いていた

「こいつはな『人身支配』と言われてるが実際には電磁波を発する能力でな、脳に直接命令をする事が出来るんだよ、お、そうだそう
だ、ついこの間開発したこの『ノーマライズ・リキッド』を貴様で
試すでしょう(ニタアアアアア」

液体の入った静脈注射を取り出し強盗1に打った

「いてえ!いてえよ!誰か助けてくれよおお!?!?!」

叫びだし、苦しんだ

「て、てめーあいつに何をした!？」

仲間が急に苦しみだしたことに驚く強盗二

「何をした?こいつを打っただけだが？」

「その薬は何なんだよ!？」

それを見ていたものすべてが思っていた疑問を代弁したかのように強盗三が言い放った

「この薬は『ノーマライズ・リキッド』と言ってな、体の構造を普通に戻す特效薬さ」

「何を訳の分かんねーことを言っただよ!!!？」

まあ、とてもじゃないが強盗に走るような奴が解る話では無かった

「最後まで聞けこの実験台が、まあここ学園都市では脳の開発をしているだろう、その脳の作りを強制的に、一気に開発したらどうなる?分散してるからいいものも一気にやったら激痛が走るに決まっているだろう、逆もまたしかりだ。まだ抵抗するか?こっちはまだ実験していない、いや、能力開発を受けた者にしか効かないからな、モルモットでの実験のしようがないんだ、お前らで実験でもしようか、捕まるならやめんでもないぞ(ニタアアア)」

悪魔の微笑みを浮かべながら言う乱に怖気づいた強盗は抵抗もせず
に捕まった

「凄いです!やっぱり本部の風紀委員は格が違います!」
ジャッチメント

初春は最大限の称賛をしたのに対して白井は

「しかし、まああんな脅しに屈したものですは」
まえの事もあってかあまり称賛できずにいたが

「脅し？何の事だ？さっき言ったのは全部本当の事だぞ」

「何を言ってるんですの！？あんなもの作れるはずありませんの！」
戸惑う乱に多小、音量をあげながら疑問を言い放った

「あんなもの、学園都市が作ろうとするか？俺はあれを気まぐれで作ったものだからな、ちなみにさっき渡した解毒剤はただの水だ」

「な、何を言ってるんですの！？じゃあ、あの者は！」

とんでもないことさなりと言う乱に今度は白井が戸惑い始めた

「言っただろ、薬だつて一粒で永遠に効く風邪薬があるか？お、もうこんな時間か帰らなきゃな、じゃあな、ばいばい」

黒「お、お待ちを、ってもう居ない！」

アリバイブロック
『腑罪証明』を使って狂を迎えに学校に行った乱であった

七月二十日超電磁砲編（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

はあ、疲れた、久しぶりに投稿したからかな？

明日にもう一回投稿するかもしれません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その四（前書き）

読もうと思ってくれてありがとうございます。
今回はステイルが登場します。

では本文です。

七月二十日禁書目録編その四

当麻SIDE

とある学生寮

今俺は狂と乱を連れて家に帰っている、乱は強盗が何とかと言っていたがどうせ落ちちは実験さえしていない薬の投与だろうし聞いててもちんぷんかんぷんだから流し聞きしている。

狂は狂で補修を寝て過ごしていたら結構すすんでたとか、きっと先生たちが急いで進めたんだろうな。

「ねえ、糞兄貴、ドラム缶ロボットがなんで人さまの家の前にうじやうじやいるわけ？」

「ん？」

狂の言うとうりたしかに清掃用ドラム型ロボットが三体もいる、もともとこの寮に配備されている清掃用ドラム型ロボットは五体のはずなんだが・・・

「不幸だ・・・」

「なにも“まだ”起きていないぞ？」

まだを強調しやがったよ乱は、でもまだ何も確かめていない誤作動か何かかもな。

「とりあえず確かめてみるか」

「あっそ」

うん狂がこういうのは予想どおり

「面倒事に決まってるけどね」

乱の言葉は否定できないけど、まあ確かめるか。
確かめた先には、

空腹でぶっ倒れたインデックスがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、あー、なんか不幸・・・だ？」
乱の目つきが変わっていないか？

「どうしたんだ、乱？」

「兄貴、早く救急車を、酷いけがだ、このまま放置すると一時間も持たない」

何を言ってるんだ？

「よく見るこの血を！！！」

そこには白い修道服がインデックスの背中、ほとんど腰の近い辺りが、一線されて傷口から血で赤く染まっていた。

「な！？」

「はあ？」

珍しく狂も声をあげ驚いたが、これは・・・

「くそつ、くそつ！！誰にやられたんだよ！？」

「誰がしたかは分からないがそんなことは後で考えるぞ、とりあえず今ここで応急処置はしておく、早く救急車を呼べ」

ああ、そうだな誰がやったなんて後で考えればいい、今は早く救急車を呼ばなくちゃな。

「ん？誰がやったか？僕達『魔術師』だけど？」
「だれだ！？」

思わず怒鳴ってしまったが怒鳴られた方は

ス「ん？僕は？ステイル・マグヌス、さっきも言ったけど・・・魔術師さ」

質問に普通^{ノーマル}に答えた。

「へえー、じゃあ君達が私達の家の前に死体寸前の物体を置いてくれたんだ、さすがに私でもそれは、さすがにちよつと不愉快かな」
「な！」

狂が顔の表情を、それは家族にしか解らないわずかな変化だったが狂がわずかとはいえ怒りで顔の表情を変えた。それに俺はかなり驚いた・・・

SIDE OUT

ステイルSIDE

ビクッ！！！！

な！？僕が睨まれただけで、凄まじただけで、後ろに下がっただとい？

こんな平和ボケした、こんな信教信が薄い日本で！？

それに・・・

何なんだ、あいつは？

僕はいろいろな国でいろいろな奴とあってきたが、あいつはそのどれでもない。

後ろで応急処置をしている奴は奴で異質だけど似たような奴とはいくらかあつてきた、だが今僕をにらんだ奴は本質からして何もかもがどの誰でもない。

それこそ、主人公でもなければ登場人物でもない、どのカテゴリーにも当てはまらない。

それでも、それでも、僕のやる事は変わらない。

「Fortis931!」

SIDE OFF

乱SIDE

Fortis、日本語では強者と言ったところか。
だがなぜ、いきなりラテン語なんか言いだしたんだ？

「炎よ(Kenaz) -」
なにを？

あ？なんで、炎が湧いてでてあんなふうに集まるんだ？

「- 巨人に苦痛の贈り物を(PurissazNaupizGeb o)

「
炎剣か？あれは、ふう、なんだ、あんなものでは狂を傷つける事は
おろか、兄貴にさえ無理だね。
あれが異能の力である限り。」

「兄貴！そいつは見るからに異能の力だ！右手で！
理想殺しで！触
れ!!!」
イマジンプレイカー

SIDE OUT

七月二十日禁書目録編その四（後書き）

次の話に持ち越します。

次の投稿は今週の金曜日になると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その五

SIDE OFF

「っ!？」

当麻は乱に言われるがままに右手を、イマジンブレイカー『幻想殺し』を使った、そして炎剣は弾け飛んだ。

「なっ!？どう言う事だ!？その炎剣は摂氏三〇〇〇度、人肉は摂氏二〇〇〇度以上の高熱になると『焼ける』前に『溶ける』はずだ!？」

そう、ステイルが言っている事は正しい、たしかにあれほどの高熱ともなれば『焼ける』前に『溶ける』はずだ、誤算があるとすれば、それは

「兄貴の右腕には『イマジンブレイカー幻想殺し』と言う異能の力ならば、超能力だろうと、魔術だろうと、神様の奇跡だろうと、打ち消せるんだ」
乱の淡々とした、嘘を言っているとは思えない説明にステイルは絶句した。

「おい、糞兄貴、どうでもいいからそこをどけ、あいつを少し痛めつける」

「お前はこつちを手伝ってくれ」

「はい」

狂の突然の変わりようにステイルは呆然とし、当麻はあきれた。

「ちっ（どうも空気がかき乱されるな、それにさっきの説明が本当だとすれば・・・）」

ステイルは舌打ちをし何かを考え、当麻は殴りかかるために駆けだした、理由は二つ。一つは乱が集中して手術するため（応急処置とは言っていたがあのレベルだともう手術に入ってしまう）もう一つはステイルをあの残忍な二人の餌食にしないため。

「世界を構築する五代元素の一つ（MTWOTFFTO）、偉大なる始まりの炎よ（IIGOOIOF）。」
当麻はもうすぐそこまで近ずいていた。

「それは生命を育む恵みの光にして（IIBOL）、邪悪を罰する裁きの光なり（AIIAOF）。
それは穏やかな幸福を満たすと同時（IIMH）、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（AIIBOD）。

その名は炎（IINF）、その役は剣（IIMS）。
顕現せよ（ICR）、我が身を食らいて力と為せ（MMGBP）
ッ！」

轟！という炎が酸素を吸い込むと同時に ステイルの修道服の内側から巨大な炎が飛び出した。
それはただの炎の塊では無かった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油の様なドロドロしたモノが『芯』になっっている。

それは人間の形をしていた。タンカーが海で事故を起こした時、海鳥が真つ黒な重油でドロドロに汚れたような そんなイメー
ジを植え付けるものが、永遠に燃え続けている。

その名は『イノケンティウス魔女狩りの王』。
その意味は『必ず殺す』。

炎の巨人は真つ直ぐに当麻を襲いに行った。

「邪魔だ」

当麻は右手でそれを振り払い、『魔女狩りの王』イノケンティウスは、相手の切り札は、飛沫となつてそこら辺に飛び散つた。

「・・・、？」

しかし当麻はそれ以上進めなかった、否、進むのをためらつた。理由はステイルが笑っていた、声をあげているわけではない、ただそこに、それこそ蟻を潰す残忍な子供の様な笑顔でそこで笑つていた。

「兄貴！後ろだ！！！！」

乱にいわれ振り返るとそこには飛沫となつて飛び散つたはずの『魔イ女狩りの王』イノケンティウスがそこにいた。

そして腕を、腕にもつた真紅の燃える十字架を振り下ろした。

七月二十日禁書目録編その五（後書き）

どうでしたか？自分で言うのもなんですが全然進んでいない、一体七月二十日はいつになったら終わるのやら。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その六（前書き）

新しく小説書きましたできればそれも見てください。

では本文です。

七月二十日禁書目録編その六

S I D E O F F

「なっ!？」

当麻は何か『イノケンティウス魔女狩りの王』の攻撃を右手で触れて防いだ、そう、たしかに右手で、『イマジンブレイカー幻想殺し』で触ったはずなのに防ぐだけにとどまった。『イマジンブレイカー幻想殺し』は触れた瞬間に異能の力ならば何であろうと消すはずなのにだ・・・

「どうなっただよ!? 防げてるのは異能の力の証拠なはずだ! なのに、なのにどうして、防ぐだけなんだ!？」

「知るか! あと少し、あと少しで止血が終わる、それさえ終われば俺もその魔術師の撃退に回る、それまで待ってくれ」

乱は止血さえ終わればステイルの撃退に向かう、それはステイルにとっては驚異的であったが、乱の性格を知っている当麻と狂は「拷問する」これがいつもの乱の回答であった、そして二人にはいつもと違う回答をした理由がすぐに解った。

それは、『魔術がなんだかわからない以上拷問をして攻撃の余地を与えるよりは撃退した方が安全だから』というような理由だろう。

そう、乱が『安全』という選択肢をとった、それこそが二人には異常過ぎる理由に思えた・・・

「解ったよ! それまでもってやるよ!」

強がり、それはこの場にいた、言った本人も気が付いていた。

『イノケンティウス魔女狩りの王』の破壊と回復のタイムラグは十分の一秒にも満たない、一瞬でも離せば、『イノケンティウス魔女狩りの王』によって消し済みになるそう、当麻が思った時

「ルーン」
誰かがしゃべった。

「意識が戻った？おい、しゃべるな・・・いや・・・しゃべり続ける、そして意識を保て、インデックス！」
乱がインデックスの名を呼んだ。

「・・・はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪
リウス』の教会』所属の魔道図書館です。正式名称はIndex-Lib
rum-Prohibitorumですが、呼び名は禁書目録で
結構です」
淡々と自己紹介をする禁書目録は、本当にあのインデックスなのか
と思わせるほど機械よりも冷たい声だった。

「先ほどの続きですが、ルーンは『神秘』『秘密』を指し
示す二四の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使われる魔
術言語で、古代言語のルーツとされます」

乱が怪訝な顔になりこう言った。

「Index-Librum-Prohibitorumだと？
あれは廃止されたはずじゃなかったのか？いやそれ以上にまさかお
前、解離性同一障害か？」

この質問に対して禁書目録は
インデックス

「最後の質問は解りませんでした、最初の質問に対して
はお答えできます。結論からいえば私はそれとは別物です。蔵書量
は10万3000冊です。先ほどの続きですが、『魔女狩りの王』
を攻撃しても効果はありません。壁、床、天井。あたりに刻んだ『

ルーンの刻印』を消さない限り、何度でも蘇ります」
解答し話の続きをした。

「灰は灰に（AshToDust）」
新たな魔術を使おうとするステイルに対して当麻は

（いまだ！この瞬間に！）
制御の緩くなった『魔女狩りの王』^{インケンティウス}から手を離し逃げた。それと同じに禁書目録の止血を終えた乱も逃げた。

「塵は塵に（DustToDust）」

「吸血殺しの紅十字（SqueamishBloodyRood）！」

それに気がつかず魔術を駆使した、もし逃げていなければ確実にあとかたもなく消し済みに。そんなことを思わせるほどの莫大な火力をその魔術は持っていた。

七月二十日禁書目録編その六（後書き）

どうでしたか？自分的には結構進んだと思います。

すみません、現実逃避です。進んでないのは気づいています。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その七（前書き）

復活！！！！

今回でステイル終わらせます！

擬音をめちやくちや使いますがご了承ください。

10/26改稿 ステイル対当麻追加

では本文です！

七月二十日禁書目録編その七

ステイルSIDE

「ちっ！」

魔術を行使した後に逃げた事に気がついたステイルは思わず舌打ちをし

「逃げたか・・・だがどこにいるかなんてすぐに解りそうなものを・・・」

冷静に状況を分析しある結論に至った。

「まさか、このマンションから出たのか？」

そう考えるとかなり面倒だ、『魔女狩の王』イノケンティウスは強力だがルーンを貼った所にしか行き来できないという弱点がある。何よりこの警備アンチス員キルなんか呼ばれたら魔術なんかは下手に使えないしな・・・

「まあ、とりあえずイノケンティウスにはあいつらを自動追尾させてるし、ここから出たら戻ってくるようにしてある。考えるのはそれからにしよう・・・」

妙に長い独り言を言ったなと思いつつもこうする事にしようと思つた矢先

ウィーン

エレベーターがこっちに来たかやはりここから逃げたようだな・・・待てよ・・・エレベーター？イノケンティウスがそんなのに乗れるはずがない。

じゃあ誰が？・・・

「はあ、めんどくさいだから殺す」

敵に回すと面倒な奴がそこにいた。

SIDE OUT

SIDE OFF

「これからどうするんだよ!？」

当麻はインデックスを担ぎながらこれからの事について狂と乱に問
い込んだ。

「・・・、解んない――」

「奴を撃退する。でなければ殺す」

聞く相手を間違えた。間違いなく当麻はこう思い自分の意見を言
うとしたがある事を思いついた。

「スプリンクラーを回したらどうだ？」

「あれを消そうってか？だとしたらばかしくて落胆するよ」

当麻が思い付いたことを乱に言うがあきれ顔で返された。

言い忘れてたが、今彼らはイノケンティウスから逃げてる最中であ
る。

「違う、ルーンだよ、ルーン。あれを消すんだよ」

「はあ、兄貴、コピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだ。そ
んなに簡単には消えないよ」

紙は水に弱い。幼稚園児でも知っている理屈だがしよせんは幼稚園
児の理屈簡単に消されてしまう。だが当麻は違った。

「ああ、だがインクはどうだ？あれなら溶けるんじゃないか？」

「・・・そうだな、だが警報装置はご丁寧にも一個一個壊されていないか？」

「あ、ごめん。暇つぶしに壊していた」

「お前はなんてことをしてくれたんだ？それさえしなければ撃退できたようなものを」

「良いじゃないじゃん」とわめく狂とそれを怒る乱をほったらかして当麻は続ける。

「そうか・・・だが管理人室はどうだ？あそこは流石に壊していないだろ？」

「ん？壊しちゃいけないけどどうやって入るの？」

「窓ガラスでも割って入る。それまで乱は時間稼ぎをしてくれないか？この学生寮を潰さないように頼むぞ？」

「めんどいけど仕方ないかな？」

こうして散らばり乱はエレベーターでステイルのいる方へ向かい、着くなりこう言った

「はあ、めんどくさいだから殺す」

内容としてもかなり間違っているがたしかに殺気のこもった一言だった。

「なんだい？君もかわいい女の子を斬りつけたのを怒るのかい？」
ただ、仕事柄殺気をあてられるのにも慣れているステイルにはたいした効果はなかったが次に発した応答はステイルでさえも言葉をつ

ぐんだ。

「ん？言いや別に怒っちゃいないよだから殺す。そもそもインデックスはかよわくはなかったけど？だから殺す。」

無茶苦茶だった。なにを言っている？そんな応答だった。そんな中、乱はこう言い放った。

「ああ、驚いてるんだね俺がこんなに殺す。を連発する事に、なに驚く事じゃない。これは『殺人衝動』といってね、これを発動させると全ての現象が俺には殺人につながるのさ」

ステイルは過去に思った事を訂正した。こいつもまた主人公でもなければ脇役でもない^{モブキャラ}と

「俺は別に怒っちゃいない、だから殺す。」

「きみが金髪を赤髪に染めている、だから殺す。」

「きみは14歳だ、だから殺す。」

「きみはヘビースモーカーだ、だから殺す。」

「きみはイギリス人だ、だから殺す。」

「何でもない、だから殺す。」

無茶苦茶すぎる、そもそもステイルは自分が金髪だった事や年齢を言った覚えはない。なのに彼はそれを言い当て殺人につなげた。どうかしている。こう思っただけだがステイルはすっぱりとこの感情を切り捨てどうして単体で向かってきたかを考えた。

（まさか今言ったのは全部ハツタリなのか？だとしたら考えられるのは・・・時間稼ぎか！？）

ステイルの考えはおおむねあっている。乱は確かに『殺人衝動』を持っているが今はオフにしておりハツタリで言ったまでだった、また前記でも書いたがこれはスプリンクラーを発動させるまでの時間稼ぎであって今発した言葉も時間稼ぎの一つであった。

（だがどうやって、僕が金髪だった事や14歳だと言う事が解ったんだ？）

たしかにスタイルはお世辞でも14歳には見えなかった。何せ180センチはあるかというほどの背の高さであるうえに頬にはバーコードの刺青、全身からは香水のにおい、さらに煙草を吸っている。どこの誰がこんなのを14歳といいあてられるだろうか。

シャ

「時間稼ぎ終了つと、じゃあ後は兄貴に任せて狂と一緒に逃げるかな。じゃあね バイバーイ」

「っ！？ま、待て！」

スプリングラーが発動したと同時にあっけらかんと7階から飛び降りて逃げる乱にスタイルは戸惑いを隠せずにいたが乱の言った『じゃあ後は兄貴に任せて』にすぐに切り替わったそして

ウィーン

「よう魔術師」

エレベーターで上がってきた当麻を見てスタイルはこう思った

（どうして日本人はエレベーターでこうも移動したがる？ いやそんなのはどうでもいいそういえばこいつは確かイノケンティウスを触っても何ともなかったな・・・まあ、あの二人を相手にするよりはずいぶんと楽そうだけど・・・）

「てか、乱はどこに行ったんだ？ 狂は狂でインデックス連れてどこか行ったし」

ぼやく当麻にスタイルはこう応答した

「彼は彼でそこから逃げてったけど？しかしスプリングラーを発動させるために彼は時間稼ぎをしていたのかい？イノケンティウスは水くらいじゃあ消えるはずがないよ」

「ああ、あんたすげーよ実際に壁とかをナイフとかで刻まれてたらなすすべがなかったよ」

「どう言う事だい？」

なにを言いたい？そんな顔で質問するスタイルに対し当麻は

「あんたは人の家に何をべたべた貼ったんだ？」

「っ！？い、いのけんていうす、イノケンティウス！！」

なにを言いたいのか理解したスタイルは魔女狩りの王を呼んだ、
イノケンティウス

そして

ゴガアアアア！！！！

その言葉と同時に『イノケンティウス魔女狩りの王』がエレベーターを溶かしでてきた

ス「は、ハハハ、きみ凄いよバトルセンスの天才だね。だけど実践が足りないかな、コピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだそんなに簡単には溶けないよ」

勝った、そんな顔で言い放ち、乱の言ったような事を言うスタイルを当麻は

当「そうだな、だがインクはどうだ」

言い終わると同時に『イノケンティウス魔女狩りの王』を殴り『イノケンティウス魔女狩りの王』は砕け散り再生しなかった

「い、いのけんていうす？イノケンティウス！魔女狩りの王！？」
イノケンティウス
名を呼ばれても魔女狩りの王はせいぜいがもそもぞ動いただけだった

当「終わりだ魔術師！」

イノケンティウス
一秒一秒ごとに魔女狩りの王の断片はボン、ボンと音を立て消えていく

「灰は灰に塵は塵に吸血殺しの紅十字！」

イノケンティウス
しかし魔女狩りの王どころか炎剣さえも出なかった

そして当麻はステイルを殴りとばし面倒事になる前に出て行った

七月二十日禁書目録編その七（後書き）

終わったー！！！！七月二十日が終わったー！！！！

文句なら聞きますから感想に書いてもかまいません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書目録編その八（前書き）

ああ、まだ七月二十日が終わっていなかった・・・
すみません自分の馬鹿さを痛感しました・・・

では本文です・・・

七月二十日禁書目録編その八

S I D E O F F

「お、おまえは何やってんだー!？」

夜に大声が響いた、もちろん周りの人はけげんな目で声の無視を見たが、それと話すものに目を奪われた

「ナニつて、インデックスこれを運んでんだよ？」

「じゃあなんで引きずってんだ!? 乱も何か言ってやれよ!？」

狂はけが人を引きずって移動していたのだった、そして当麻は乱に何で注意しなかったんだと怒ったが

「なぜだ? 止血も終わっている。止める必要はないだろう?」

乱は一〇〇〇歩引いてもずれた事を言い本気で戸惑っていた、それに当麻は頭を抱えインデックスを自分で担いだ

「ん、ん? ここはどこ? たしか私は・・・あ! 魔術師は!? みんな大丈夫!？」

「大丈夫か? 止血は終わったがまだ安静にしている」

気がついたインデックスに対し乱は氣遣ったが・・・

「引きずるのは安静なのか? (怒)」

「それもそうだな・・・」

当たり前事に気づか無かったようだ

「あれ? 血が止まっている? たしか・・・」

「血は止めた。あと悪いがお前の知識を読ませてもらったぞ」

「え!?! き、きみ大丈夫? あれは言ってみれば猛毒だよ!？」

「ああ、後悔はしていないがはつきり言ってまだ頭がずきずきする」
まわりの人間はなにがなんかわからないという顔をしているがそれを放っておいて乱は

「今夜の宿どうする？ クレジットは持っているがここにホテルなんてそんないし・・・」

初歩的な事を言っていた。ちなみに取り出したクレジットカードはブラックカードで周りの人間は目を丸くしていた。

「おやおやー？ 上条ちゃん小さい子達連れてどうしたんですかー」
気の抜けた、当麻にはどこかで聞いたことのある声が聞こえてきた

「あ、小萌先生っておい！？ 乱なに日本刀取り出してんだ！？」

「人が気にしていることを、よくもよくも、しかも何が悲しくてこんな見た目は子供中身は定年退職まじか教師に言われなきゃいけないんだ」

まあ確かに乱は年齢にしたら小さく詳しく書けば、中二だと言うのに小四といっても通じるほど小さいが（小四からミリ単位でしか成長していない）目の前にいる教師は、定年退職まじかだけど小一だと言っても通じるほど小さかった（とゆうか年齢言っても信じられない）

「離せ兄貴！ あいつをばこる！」

「やめる乱！ おい狂こいつを頼む」

「え？ ちょ、乱が上から・・・げふっ」

当麻は乱を狂のの所に放り投げ狂はそれを受け止めれずに下敷きになり二人とも気絶した

「いえ、寮が燃えちゃって・・・今日泊まるとこないですよ」

「そうでしたかー、毎度おなじみの不幸ですね。うーん、あーそう

です、今日うちに泊まりませんか？スキヤキにする予定ですし、みんなで食べたほうがおいしいですし」

「え！？本当ですか！ありがとうございます」

こうして今日の宿が決まったのであった。続く

続き

とあるボロアパートの一室

「あ！それ俺が育てた肉！」

「そうなんだー（もしかもしゃ」

「乱ちゃんはお肉食べないんですか？」

「おれは肉は食べない主義だからな。しらたきおいしいな」

「がつがつがつ」

当麻と狂はおもに肉ばっか食い、小萌は肉を全く食べない乱を氣遣い、乱は肉は食べない主義だと言う事を言いながらしらたきを食べ、インデックスは無心に食べ物喰っていた

「そうなんですかー、いやーありがとうございます。食費出しています。食費出していただいて」

「宿代と思ってくれ、豆腐もうまいな」

どうもこのすき焼きの材料は乱が宿代の変わりに出したもののようなのだ。

「いえいえ、まさか高級国産和牛を十人前、高級国産黒毛和豚をまたも十人前、さらに京都産の野菜、さらにさらにマツタケを五本、高級木綿豆腐も買ってもらえるなんてこっちがお礼をしたいぐらいですよ」

ボロアパートの宿代としては十分すぎる食費だったが乱は当たり前のようにこれを渡したようだった

「しかし、本当だったんですねー」

「な？言っただろ？」

「そうですねー、まさかこいつら二十人前はあろうかという肉をペろりと平らげるなんて・・・先生も驚きですよ」

そう、当麻、狂、インデックスは二十人前の肉をたった三人で平らげたのだった。（小萌も少し食べたが半人前行くか行かないかで野菜に移った）

こうして七月二十日の夜は平和に過ぎて行つた。

七月二十日禁書目録編その八（後書き）

すみません前の話で『終わったー』と書きましたがまだ続きます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

いやほんとお待ちしております。アブノーマル（ついでに皆さんの作ったの異常
マイナスと過負荷もお待ちしております）

七月二十一日その一（前書き）

七月二十日がようやく終わりました。

七月二十一日何話続くのだろうか・・・

では本文です。

七月二十一日その一

SIDE OFF

とあるボロアパートの一室

「で、この三人は誰なんですか？上条ちゃん」
小萌は当麻に狂、乱、インデックス、の三人が誰なのかを聞いている最中であつた。

「・・・三人とも義理の家族です」
まあ。確かに狂と乱は義理の家族なのだが・・・

「・・・変態ちゃんですか？」
「だああ！解つてますよ！実はルール違反！義理はマナー違反！でもこの二人は本当に義理ですからね！」
小萌は狂と乱が義理のだと言う事は信じたようだが次の問題であるインデックスの事に突入し始めようとしたが

「ジャツチメント風紀委員に行くけどいいか？」
「あ、そついえば私もだ。初めてだなー。ねえどうだった？乱」
狂と乱は^{ジャツチメント}風紀委員に行くと言い出し、答えも聞かないで出ていった。

「・・・解りました。スーパーに行ってくるのでそれまでに先生が帰ってくるまでに、何を話すかをちゃんと整理しておいてください。それと」

「それと？」

と先生モードで話す小萌に質問をする当麻

「先生、買い物に夢中になつてると忘れるかもしれません。帰つたらズルしないで上条ちゃんから話してくれなくっちゃダメなんですからねー？」

そう言いながら笑顔で買い物に出ていった。そして部屋にはインデックスと当麻だけが残ってしまった。

「悪いな、なりふり構ってられないんだろうけど・・・」

「ううん、あれでいいの。あの人は、とゆつかこの街の人は大半がかかわっちゃいけない事だから」

と首を軽く振りながら言うインデックス

「きみの義弟さんが読んだ知識は、実はめちゃくちゃ危険なの。大抵の人は目次を見ただけで頭がパンクしてもおかしくないものなんだよ」

「あー、まあ乱は何をしてもいつつも、運も技術も才能も関係なく異常な結果しか出さないからな。いまさら驚くような事じゃねーや」
「乱が読んだ知識、魔道書の事だがこれは伏せて言つたがやはり危険なものだと説明するインデックスに対し、当麻は驚くようなことじゃないという」

「そうなんだ・・・。もうその時点で一種の才能のような気もするけど・・・」

「いいや。あれはただ異常なだけだ、本人も気持ち悪い結果しか出さないと言っていたしな」

インデックスは何か納得しないとゆうな顔をしながら聞いてくるが、やはり当麻は異常なだけだと言う

「そんなことよりどうするんだ、これから」

インデックスは魔道書の事をそんなことで済まされたことにいささか不満げな顔を浮かべたがすぐに答えた

「うん。それなんだけどね、らん？が帰ってきてから考えようと思うの魔術師も昼間にはあまりはでな行動しないだろうしね」
インデックスは乱のことを高く評価しており、さらに魔術師は昼間にはあまり派手には行動しないと言う

「そうだな。乱が帰ってきてからにした方がいいよな」
当麻も乱が帰ってきてからの方がいいと賛同し、魔術師の事についてもたいして知らないためインデックスの言葉を信じた。

七月二十一日その一（後書き）

短い！短すぎる！描写云々も多分解りにくいと思う！

不満がある方は感想の悪い点に書いてください。できる限りなおします。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十一日その二（前書き）

こんにちは、気が付いたらお気に入り登録が50を越していました！
これも皆様のおかげです！

では本文です

七月二十一日その二

SIDE OFF

風紀委員会 177 支部

カタカタ、そんな音を出してパソコンのキーボードをたたく狂。
ただ、乱は・・・

「え、えつと。乱君？大丈夫？そんなに急いで仕事しないでいいんだよ」

「急ぐ？これくらい普通だろ」

乱は脳の構造上、人の演算機能上、不可能な速度で書類をかたずけていた。

「乱はそれぐらいが普通なんだよ。気にしない、気にしない。バカに見えるから」

と乱はそれぐらいが普通で気にしてたらバカに見えろと言う狂

ウィーンと暗証番号が必要な風紀委員会のドアが開き佐天が入ってきた

「こんにちはー」

「さ、佐天さん。待つてください」

元気に佐天があいさつをしたが誰も返さない

「・・・おい、お前は風紀委員なのか？」
ジャツチメント

「え？いえいえ、私は一般の学生ですよー」

乱が風紀委員なのかを聞いたが即答で佐天が違うと言った

「・・・さつさと、出てけここは原則風紀委員以外は立ち入り禁止だ」

乱がまっとうに理にかなった訳もいいい出てけと言ったが

「え？どうしてですか？」

佐天は出ていく気がない。少なくとも乱にはそう聞こえ乱は立ち上がり、思いつきり（本人は手加減をしたようだが周りから見たらそう見えた）佐天を蹴りとばした

「！？げほっ、え？どっ、ごほっ。どうしてっ？」

蹴り飛ばされた佐天は何がどうなってるのか解らないと言うがそれに対し乱は

「どうして？それはお前がそこにいるからだろ？さつさと捕まれ、犯罪者が」

佐天がそこにいるからだと言い、捕まれ、犯罪者、そんな言葉を投げかけ、睡眠薬の入った静脈注射を投げ佐天は意識をなくした

「な！？佐天さんが何をしたって言うんですか！たしかにここは原則的には風紀委員以外ジャッチメントは入ってはだめですけど、これは捕まるようなことではありません！」

「ああ、たしかに入るだけはな。だがこいつは出て行けと言っても出て行かなかった。それに俺は部外者が大っきらいなんだ、そのせいで仕事が遅れた、これは業務執行妨害に値する」

初春はたしかに立ち入り禁止だが捕まるようなことではないと言うが乱は業務執行妨害だと言ったが行き過ぎなことには変わりなかった。

「それでも、それでもやりすぎです！」

「どこが？俺ならこんな骨折、ものの十秒で治るぞ。狂にいたってはすぐに無かったことになるし、兄貴でさえ数時間で治る」

やり過ぎだと言う初春だが、乱は自分の周りで考えているためやり過ぎだと言う事に首をかしげていた

「……で、でも」

「なにもないなら仕事に戻るぞ」

乱の常識の無さに驚き、何もいなくなった初春に対して、乱は納得したものとして仕事に戻っていったが

ウィーンとまたドアが開き、とゆうかクラッキングを受けて強制的に開いてきた

「黒子ー、ちょっと調べたいものがあるんだけど、ここのを使わ・・せ・・て？」

美琴が入ってつきたが横たわった佐天を見て驚き言葉を濁したが

「またか、さつさと出て行け」

「なんで！佐天さんがこんなことになってるのよ！？それにどうして、どうしてあんたは普通に仕事してるのよ！？」

乱はうんざりしながら言い放ったが何か騒ぎ始めた美琴を敵視しはじめ

「良いから出ていけ！これが最後の忠告だ・・いや出ていかなくていい。今すぐ刑務所に行け」

「なっ、どうしてよ！私が何をしたって言うのよ！」

乱はなぜか美琴に出ていなくてもいい、そして刑務所に行けと言いつつ放った

「はっ、お前の人間性なんてしょせんは自分が一番かわいいんだ。」

だから自分に危険が迫れば、すぐに前話していた、他人を忘れるんだ」

「っ！？良いから質問に答えなさいよ！」

乱は美琴の人間性を激しく非難し、美琴はそのことに反応はしたが無視して質問に答えると電撃を出しながら言い放った

「罪状は殺人未遂、窃盗、能力の使用、数えていったらキリがないな。それとこれはまだ調べていないが、俺の所属している研究施設に幾度となくハッキングが仕掛けられているんだ。しかも高位能力者の仕業らしいんでな」

とまあ、冗談でもなく本気で言っている。そんな口調で罪状を言っていく乱に対して美琴は

「な、なによ！たしかに自動販売機からジュースを捕ってるけど、

あの自動販売機は万札のんだからいいのよ！」

「もう総額は二万はくだらないぞ」

美琴はとんでもない言い訳をしたが、乱に一掃された

「っ！？でも殺人未遂はしていないわよ！能力は使用したけど、あいつには効かないからいいでしょ！」

「効かない？それだけで能力を使用したのか？じゃあそいつは能力のサンドバックになれと？そもそもお前の能力はレベル5だ、それだけで殺人につながる。さっさと捕まれ」

正論、乱の言葉はまさしく正論だった。

「な、なによー！！！私は、私は！レベル5なのよ！いいじゃないそれくらい！」

能力を使いながら無茶苦茶なことを言い出した美琴。その電撃は機材に、物資に、そして乱に当たった

「お、お姉さま！？何をしてらっしゃるんですの！？」

「そ、そうですよ！なんで、なんで！」

黒子と初春は美琴を止めようとしたが美琴は

「なによ！私を非難する方が悪いのよ！それに佐天さんにあんなことした奴なのよ！別にいいじゃない！」

完全におかしいそんなことを言い放ちながらも電撃を放つのをやめたが

「何を言ってるんですの！？」

「そうですよ！なんで、佐天さんに攻撃したんですか！」

初春の言葉に美琴は首をかしげながらも、もう一度乱を見たが、そこにいたのは服が焦げた佐天の姿だった

「え？どうして？私は・・・」

乱に攻撃したはずだそう言いながらも乱を探す美琴

ミラージュブナイフ

「『身気楼』この能力は相手の自分に向く意識をいじる能力だよ」

美琴たちの後ろにいつの間にかいた乱は、ご丁寧にも今使った能力の説明をした

「ちなみにこれは自分以外を自分に見せることも出来るんだぜ」

「くっ、クソ！」

説明をし続ける乱に攻撃を仕掛けようとする美琴

ミラージュブナイフ

「さて問題です。いま、俺は『身気楼』を使っているでしょうか？」

「なっ！？」

能力の説明が終わると、問題を出し、美琴はそのことを考えていなかったのか驚いていた

「どうしたんだい？みんなを攻撃すればそれでいいじゃないか。そうすれば自分の権威は守れるよ」

「う、あ。え？ど、どれがアイツなの？」

疑心暗鬼それが美琴の心を蝕んでいき、とうとう地にへたり込んだ

「なんだ、レベル5とは言えこんなものか」

「ひ、卑怯者！」

乱は美琴をたいしたことの無いことに呆れていたが、誰かが乱を卑怯者と言った

「卑怯者です！あなたのやった事は卑怯です！」

「どうしてだい？初春さん」

みな、狂と乱でさえ、初春が行ったことに驚いていた

「どうして？よくもそんなことが言えますいね！あなたは人になりすまし、自分は闘わず美琴さんを・・・」

言葉が怒りで出なくなったのか初春は何も言わなくなったが乱は答えた

「卑怯か・・・あいつのやった殺人未遂のほぼ100%がうちの兄貴が標的なんだよ。目的は手段を正当化させる、治安のため、能力に対する見解のため、人の命のため、何より家族のために行動した俺が間違っているはずがない！誰もアンパンマンがバイキンマンを殴るのを批判しないそれと同じさ」

例えばともかくたしかに乱の行ったとおりだった、警察は銃を持つものに対抗するため銃を持つそれと同じだ。

「し、しかし・・・」

「じゃあ俺の何が間違っている？なにも間違っていないだろ」

そう言いながら業務に戻っていく乱。初春は何も言う事がなくそれ

でも反論しようとし立ち尽くしながら何かを考えて、黒子は輸送された美琴を追いかけて、そのほかの風紀委員はなににも出来ずにただ仕事に戻っていった。ちなみに狂は『ジャッチメント大嘘吐き』で壊されたものを直していた

七月二十一日その二（後書き）

投稿終わりました。

皆さんの考えた能力は今もお待ちしております。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十一日その三(前書き)

前書き前の話の続きです。

睡眠様とマックス様の考えてくださった能力が出てきます。

では本文です。

七月二十一日その三

SIDE OFF

風紀委員177支部

「うーん、終わったー！」

狂が間の抜けた声で終わったと言ったが周りの空気は重苦しかった

「固法所長、終わりましたー」

「え？あ、うん。ありがとう」

なぜか所長と付けて固法を呼び、固法は解ったと言ったが

「ねえ、狂ちゃん？乱君はいつもあんな感じなの？」

「え？ああ、そうですね。でもまあ、今私は機嫌が悪いから、無関係な他人を助けるのもいいかな？」

固法は乱のとった行動がいつもあんな感じなのかと聞き、狂はそれを固定したが機嫌が悪いため、先ほどからずっと、正しくは午前中からずっとあの横たわっている佐天を助けるかといった。（ちなみに今の時間は16時を過ぎている）

「ねえ、乱。知ってる？」

「なんだ狂？」

「人間は普通はね、骨折を直すのに数カ月かかるんだよ」

狂は乱に当たり前すぎることを言ったが乱の反応は

「・・・そうか、前から不思議に思っていたんだ、何で骨折ごときで病院に行く奴がいることが」

ガチなめんではじめて知ったとゆう顔をする乱に狂を除いた周りの

風紀委員はこいつは本当に天才なのか？と思ったが次に狂の言う言葉に啞然とする

「それから、手術をして腹切った場合は勝手にはそう治らないからね」

「・・・それでか、たまに手術をした後まわりにいる奴らが泣いて傷を縫合してくださいと言うのはそうゆうことだったのか」

何を言ってるんだこいつは、どこまで常識がないんだ、と周りにいる奴が驚いていたが乱が次にとった行動に比べればこんなのは、まだまだ常識が通じる範囲であつた

「ふむ、いささか機嫌が悪かつたとは言えこいつには悪いことをしたな。狂、悪いがこいつの骨折を『ファイブフォーカス五本指の病爪』で直してくれないか？」

「オーケー」

狂がオーケーというやいなや、爪が正しくは右手の爪がありえない速度で伸び始め、佐天を引っ掻いた

「う・・・ん。あれ？私は確か・・・」

「さ、佐天さん！気がついたんですね！」

そしたら佐天が目を覚ました事に初春は泣いて喜んだ。驚いたことに怪我也治っていたがそれも初春は喜んだ

「ああ、お前が元凶とはいえ悪かつたな。これだけでは割に合わないだろうからこの能力を貸してやろう」

乱は謝罪をしながら指を佐天のおでこにあてた

「このスキルは『ハンドミラー実力数学』と言ってな、その能力は相手の能力と

真逆の能力が使える能力なんだ。例えば、どんな風でも起こせる能

力者が相手だった場合は、お前はどんな風でも止める能力者になるんだ。例えば、どんな電撃も操れる能力者が相手だった場合は、お前はどんな電撃も乱すことができる能力者になれるんだ。ただし勝ちはその望めない上に、無能力者が相手だったり、原石が相手だった場合は、その能力は無能力者にならないし能力査定では無能力者扱いになるから気を付けとけ。解ったか？それとお前の能力である空力操作はもらつていたがな」

エアロハント

能力の説明をした乱、ただし偽りがあるとすれば、それは原石には無力だと言う事であった。実はこの能力を貸す際に乱はスキルをいじくり原石の能力には無力という風に改造した。

「え？あ、えつと・・・ありがとうございます？」

佐天はいまいち状況が解らないようでとりあえず礼を言っておいたようだがたしかに頭の中で何らかの演算があることに気がついたようだ

「ス、スキルを貸す！？君そんなことができるの！？」

固法は周りにいた者たちは驚いた。それもそのはず、スキルを貸すそれはどんな能力者でも不可能なことであつたからだ。

もしスキルを貸す能力者がいたとしてもスキルはそれだけなため、貸すスキルがないため無理なことであつた。

それを乱はさらりと行つたのだつた。

「できる。でもまあ、このスキルの本質は引き分けを狙つたためのスキルなわけであるから俺には必要がないしな。ああ、初春これには副作用がないから安心しろ」

乱はできるといい、さらにこの能力は必要がないとも言つたあとに

初春が疑わしい目で乱を見ていたため、副作用はないと言った。

それからは佐天がもう来ません、今度来るときは風紀委員ジャッチメントになって
いますと言いでていき、比較的には普通に過ぎていった。

「ねえ、狂ちゃん、あなたにもさつき乱君が使っていた・・・ミラ
ージューブ・・・」

「『身気楼』ですね、いや全く効きませんよ。だって私が乱を見違
えるなんてありえないじゃないですか」

目をうつとりさせながら効かないと言う狂に苦笑いを浮かべる固法

「まあ、ぶつちゃけ、これも能力なんですけどね」

「・・・能力なんかいい！！！！」

さらにと種明かしをする狂に周りにいた数人のノリのいい風紀委
員ジャッチメンが突っ込んだ

「この能力の名は『現実主義者』リアリスト 私がありえないと思った能力を無
効化させる能力なの。正しくは私には効かなくするだけだね」

狂が説明した能力は、この学園都市ではかなり使える能力ではある
が、

この能力が発揮のはここだけであった、何せ原石なんて一生に一人
で会えるかどうかといった白物でもあったため、今までこの能力の
存在さえ気がつかなかった。

実際、狂と乱は自分の能力を小分けした総数は知っていても全ての
能力を把握しているわけではなく、精々がまだ半分を知っているか
どうかといったところであった。

「まあ、強制力で言えば糞兄貴の『幻想殺し（イマジンプレイカー）』の方が強いみたいけど」
最後に何かわからない能力を愚痴った狂だが誰も聞いては来なかった。

なぜなら

「固法、黒子の分も終わらせといたぞ」
乱が自分にお街の仕事も終わらせたとううことに皆が驚いたためであつた。
ジャツチメント
何せ風紀委員の仕事は多忙きわまる、自分の仕事でさえ残業しなければ終わらないほどに多い時でさえあるからだ。

「え？乱君、本当に？」

「ああ、これくらいその気になれば一時間で終わるだろ」
乱の言葉に周りにいた者たちはこう思った、やっぱこいつ天才だわと・・・

七月二十一日その三（後書き）

解りにくい！と思います。

リアリスト
『現実主義者』は睡眠様からの過負荷です。

ハンドミラー
『実力数学』はマックス様からの過負荷でしたが少し採用しやすくしたため異常として使わせていただきました。

これからも異常、過負荷を応募させて頂きます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十一日その四（前書き）

よし！戦闘描写なんか嫌いだ！
だから戦闘描写は有りません

では本文です

七月二十一日その四

SIDE OFF

夜

「はあ」

とため息をついた当麻だったが、彼は今、銭湯に行つてると中だがその理由が狂、乱、インデックスが銭湯って何？と、インデックスが仕方ないが狂と乱がとっぴょうしもないことを聞いてきたからであつた。（とは言つても風呂に入る手段はこれしか選択がなかつたのだが）

どうも当麻が学園都市に行った年に、乱がまた新しい発見をしてその莫大な賞金で山をいくつか買ったら一つは金脈が見つかつて、さらに他からは温泉が噴き出して銭湯に行く必要がなかつたようだ

そうこうしているうちにインデックスが銭湯に向かって走り出した

「おい、狂。とりあえず追っておけ。銭湯に着いたら電話しろ」
「解つた」

乱が狂にインデックスを追えと言い、それに今日は従つた

「珍しいな。狂がお前以外でこうも世話を焼くなんて」

「兄貴。周りがおかしいことに気がつかないのか？それと」

乱は当麻におかしいことが気がつかないかと聞き、そして

「おい！そこにいる奴出て来い」

道の先に叫んだ。当麻はあわてて周りに頭を下げたが誰もいなかった

「いつから気が付いていたんですか？」

そして道の先から突然、女の人が出てきた。その格好はTシャツにジーンズの片脚だけを大胆に切ったという、まあ普通の格好ではあったが。二メートルを越そうかという日本刀を持っていた

「最初から。これだけおかしい状況をつくってんだ警戒されてもおかしくはないだろ？」

ただし乱は日本刀^{あれ}なんかは比較にもならないほど危険なものを持っていたため、たいして何も思っていないようだった

「神浄の討魔ですか。それと神浄の蘭ですかいい真名です」

「兄貴は知らんが俺はちげーよ。目的はなんだ？」

なんかこの二人にてるな話きかないところとかと、当麻は悠長なことを思っていたが。今はやばい状況だという事はちゃんと理解していた

「^{かんざき かおり}神烈火織と申します。目的はインデックスの回収です。・・・で

きればもう一つの名は語りたくはないのですが」

「魔法名的事だな？」

魔術師の名は神烈火織というらしいが、もう一つの名は語りたくはないと言ったが、当麻何のことが解らず首をかしげたが乱はすぐに理解したが、なぜそのことを知っているのかわからない神烈は眉をかめた

「ああ、一応いつとぐが俺はインデックスの知識を全部読んだからな」

「なっ！？そ、そんなことはあり得ません！あれは私達でさえ一冊読めば廃人とかすようなもののなに」

乱の言葉に驚く神烈

「あははは！いや、驚くほどの事じゃないさ。まあ、インデックスの回収か。それはなぜだ？お前はイギリス清教の者だろ？」

「驚くことです！それになぜ私がイギリス清教の者と？」

「ん？ああ。俺、あの女狐の寝床の科学的な設備を設けた時にお前を見たから」

神烈は自分がイギリス清教の者とばれたことに驚いたがその理由を聞いてさらに驚いた

「質問には答えた。今度は俺の質問に答えろ」

「・・・。解りました。いいでしょう」

そして神烈はインデックスを回収する理由を話した

「完全記憶能力。それが全ての元凶です。彼女は一度見た物を絶対に忘れることはありません。そして彼女の脳の85%を10万3000冊の魔道書が使っており、残りの15%で私達でしょう・・・じん・・・と？」

神烈が説明している途中で乱が笑いだし、こう言い放った

「完全記憶能力ねえ。さて問題です。俺も完全記憶能力者です。さて俺は何歳でしょう？お前はおそらくこう続けようとしたはずだ。

『15%を一年以内に使い果たす』と。じゃあ俺は何歳だ？」

「・・・10歳ですか？」

ぶちっ。そんな音を立て乱がぶち切れた。

「俺は！俺は！14だーーーー！！！！！」

「落ちつけ乱！クソ！こんな時は、困った時の幻想殺し」
イマジンプレイカー

当麻が右手で乱を触ると乱の怒りが少し収まり、こう続けた

「はあ、はあ。まあ、お前の仮説が正しければ、俺はもう死んでな

いとおかしい」

「あなたが完全記憶能力だという証拠がありません」

神烈は乱の切れように少し驚いていたが冷静に答えた

「そうだな。じゃあ仕方ないな。さて、第二問です。この携帯は誰につながるでしょうか？」

この問題には神烈も当麻も解らないというような顔をした

「正解は狂です。さらに問題です。狂は誰と行動しているでしょうか？」

「っ！？」

神烈は答えが解ったようで驚いた。否。あせった

「正解はインデックスです。そして、最終問題です。俺は狂に何を頼むでしょうか？」

「何が、条件ですか？」

神烈はこの答えも解りその答えを回避するための条件を聞いた

「いや、なに。とりあえずは俺の話信じるところからかな？」

乱の条件は簡単だったため、神烈はその条件をのんだ。そして乱は説明していった。

まず、科学的に言えばたとえ完全記憶能力だろうと、一年に脳の15%も使うにはありえないという事。

「そんなことはありません！現に彼女は1年周期で苦しみ始めます！」

「それは魔術でどうにもなる話だろ？バケツにコンクリを入れて、バケツに入る水の量を減らすようなものだ。それに人間の記憶は一つじゃないんだ。知識をどれだけ敷き詰めようが、思い出を圧迫することはあり得ない」

今になってその事に気がついた神烈は唇をかみしめ

「大体お前らは、科学的とまでは行かなくとも。ほかの例とかは調べなかったのか？あいつが初めてなわけだはないと知らなかったとは言わせないぞ。少なくともほとんどの完全記憶能力者は7歳なんかでは死なない。それどころか常人より長生きしたっていう例まであるんだ」

乱の言葉にますます自分を責めるような顔をする神烈

「まあ、今は銭湯とやらにも入りたいしな。それが終わったらインデックスを助けるのを助けてもいいぞ？これを受けるかはお前たちの自由だ。教会では無くお前たちのな」

乱の言葉に受けるかどうかを迷う神烈だが

「これはステイルとも相談しな。大丈夫あいつの記憶を妨げてるものだけを消すから。そして俺らが銭湯に入ってる時間だけ考える時間をあげよう」

考える時間は答えを出すには短すぎた。それにあのステイルが、この申し入れに素直に答えるはずもないと神烈は解っていた。しかし、この申し入れを断れば、永遠にインデックスを救う事が出来ない事も理解していた

「解りました。ステイルとも相談してみます。私個人としては是非でもこの申し入れは受けたいです」

「結構、結構。じゃあ、あの公園で待ち合わせね」

そうして二人・・・三人は別れていった

「なあ、乱」

「なんだ兄貴？」

かなり久しぶりに話した当麻は乱にこう質問した

「お前って、どうしてそうも口調が激しく変わるんだ？」

「・・・気にするな」

何事もない普通の問答をしながらこの二人は銭湯に向かっていった

七月二十一日その四（後書き）

ぐ、ぐちゃぐちゃだと思います。

読みにくかったと思います。

どこをどう直せばいいか解りません。

誰か教えてください。

遠慮なんかなくていいです。

びしばしいってください。

異常、過負荷はまだまだ応募しています。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十一日その五（前書き）

昨日いろいろあり投稿できませんでした。
すみません

では本文です

七月二十一日その五

S I D E O F F

夜のとある公園

「僕は反対だね」

赤髪神父もとい、ステイル・マグヌスは乱の提案を神烈から聞き、却下した

「しかし、この提案以外で彼女を、インデックスを救う道がありません」

神烈はそれでも乱の提案を実行したいという

「君も見ただろう。彼とその義妹は普通じゃない！何をしでかすか解ったものじゃない！」

「彼に、インデックスを利用する必要はありません！それに利用するのであれば、我々にあの事を教える必要はありません！」

今にも魔術を使った喧嘩になりそうな喧噪で言葉を放つ彼らを、不審な目で見る者は、いない

「とにかく僕は反対だからね。それじゃあ、今まで僕達がしてきたことは、何だったんだか解らなくなる」

ギリッ、と歯ぎしりをして言い放つステイル

「今までしてきたことと、今からすることは関係ありません！それにさっき調べてみましたが、たしかに完全記憶能力者が、七歳やそこから早死にする例はありませんでした。全員が天寿を全うしています」

息を半ば切らしながら、真実と事実をいう神烈

「クソッ！解っているんだ！彼がインデックスをちゃんと助けることも！何もかも！でも彼女が僕たちと過ごした日々を思い出すことはない！僕達が彼女にやってきたことが、無くなることはないんだ！」

「ん？後の方は確かに無くならないけど、インデックスが君たちと過ごした日々を思い出すことはできるよ」

ステイルが本音を言い放った後に、どこからともなく現れたのは乱であつた

「なっ！？いつからそこに！？」

「やあ、で決まったのか？まあ聞かなくても解るけどさ」

驚き思わず言葉をあげた神烈と、驚き言葉も出ないステイルを、ほつとき提案を引き受けるかどうかを聞く乱

「・・・、ステイルいいですね？」

「ああ、僕たちは君の提案を引き受ける」

「そう、まあ、インデックスを縛っているのは記憶だけじゃないんだろっけどさ。それに記憶を妨げているのを外したとたんに、何かしらの防護装置が働くけどいいね？」

提案を受け入れた二人に、自分が知ってる事を話す乱

「ほかにどんなものが、彼女を縛っているんだ！！！」

「ステイル！？」

乱の言葉を聞くと同時に乱の胸倉を掴みかかるステイル

「どんなのつて。そりゃあ、遠隔操作装置とかが一番有力かな？まあ、それがなかったらインデックスは、君たちの言うロンドン塔に両手足を斬り落として、一生幽閉になるから、これを無くすのは反

対かな」

たんと問いに答える乱に二人は、戦慄すら覚えた

「で、どうするの？インデックスの記憶を正常に戻すの？戻さないの？」

そう、言ってきたのは乱では無く、いつの間にかいた狂であった。そしてその横にはインデックスがいた

「なっ！？インデックス！？なぜここに！？」

またも驚く神烈に対して、ステイルは今にも怒りが爆発しそうな顔になっていた

「ねえ！？記憶を妨げるものって何なの！？私は知りたいんだよ！」

「はあ、どうする本人はこう言っているが？俺、個人としては被体験者の感情を優先したいんだが」

インデックスは真実を知りたいといい、乱はインデックスの感情を優先にしたいといい、この言葉に魔術師たちはとうとう折れ、乱の提案を受け入れた

夜 とあるボロアパートの一室

今この部屋の住人である。小萌は銭湯に行っており、この部屋には魔術師が二人と原石が三人という世にも奇妙な構図が出来上がっていた

「まあ、説明はこれで終わりだ」

乱はここにいる全員にインデックスのおける状況及び、これからすることを説明した

「あの、すみませんが・・・、どこでそんなことを知ったんですか？おそらくそれらはイギリス清教の、いやイギリス国内でも最高機密に分類されるはずのことですよね？」

乱の行ったことに驚く神烈は乱に質問したが、乱はさらりと

「ん？ああ、あの女狐と英国女王を脅した」

犯罪行為を言ったが誰も方法については聞かなかった

「じゃあ、開始するか。まずは『寝・ろ^ネ』」

乱が寝るというとインデックスは驚くことに寝た

「おい、兄貴。インデックスの口の中に右腕を突っ込め」

「いや、あの・・・もうちょつと優しい言い方はできないんですか？」

乱は次の指示を当麻に出したが、当麻はもうちょつと優しい言い方をしてくれと言いながら、インデックスの口に右腕を入れた

「っ！？」

すると当麻は大きく後ろに跳ね飛ばされ

「警告、第三章第二節。index Librorum
- Prohibitorum インデックス 禁書目録の『首輪』の自己

再生は不可能、現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、
侵入者の迎撃を開始しますッ！？」

インデックス
禁書目録は、現状を確認し終わったときに、いきなり後ろから乱が
現れ人体力学的に、筋肉量的にありえない力で抑えられた

「おい、兄貴早くこいつに触れ」

「お、おう・・・」

すんなり終わることに、ここにいた全員が目丸くしていた

七月二十一日その五（後書き）

よし！！！！一巻分がやっとかっとな終わった！！！！

ちなみに、これからも続きますよ

解りにくい所があれば報告してください。できる限りなおします

異常、過負荷、応募しています

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

乱の過去（前書き）

一巻分が終わったんで、乱の過去を書きたいと思います。
では本文です。

乱の過去

S I D E O F F

上条 乱、この名は学者ならだれでも知っている名前だろう。しかし、乱が孤児であったという事実と、乱という名が戸籍上は違うという事実は意外と知られていない。

乱が生まれた家は、ごくごく普通の一般家庭であった。別段これといった自慢も無く、普通の人生を歩んできた両親の間に乱は生まれた。

ただ、乱は普通の家庭には重すぎるほどに、異常であった。生後半年には、ほぼすべての日本語を理解し、字も読めていた。

一歳の誕生日を迎えるころには近所の図書館の本を読破し、大学レベルの問題も難なく解いていた。大人たちは最初はこそ、もてはやしたが、すぐに気味悪がって遠ざけるようになった。

事実、彼の周りでは良く君の悪いことがよくあった。

リモコンを押してもいないのにテレビがつく。

ボールが乱に当たったはずなのに、貫通したかのように直進する。発育が異様にいい。

骨折したはずなのに十秒後には治っている。

拳げていったらキリがないほどに、異常なことがよくあった。

そんな彼を、生みの親は気味の悪い子とした。そして、学園都市の出張所のような病院に彼を連れていき、乱の本質を調べようとした。

病院の待合室に一人で待たされる乱は、もちろんここがどこなのかも、何のために連れてこられたのかも解っていた。そして、もちろんまともに受けるつもりはなかった。

そう思いながら、ふと隣を見てみると女の子があり、なぜか彼女の周りだけズタズタになっていた。そして、女の子は乱に気づき、いきなりこう言い放った。

「全く、大人たちも的外れだよね。人間は無意味に生まれて、無関係に生きて、無価値に死ぬのに」と

乱は当時三歳で隣にいる同い年ぐらいの女の子にはじめてこう返した。

「気が合うね」と

実際、乱は無意味に生まれ、無関係に生き、無価値に死ぬ。これが人の人生だと思っていた。

乱は能力こそ異常アブノーマルであれ、性格は、心は過負荷マイナスに近かった。否、過マ負荷イナスだった。

そうこうしている内に乱の番が来て病室に行くことになった。

入った病室には医者が一人おり、質問をしてきて、最後の質問を医者がしようとしたら、乱はそれを遮りこう言った。

「すみません。僕の症状こころは異常なしってことにしてくれませんか？病院嫌いですし」と

乱が言ったが医者はこれを拒否した。だが乱はこれを予想していたかのように、どこからともなくディスクを取り出し、こう続けた。

「じゃあ、ここに原石50人分のデータがあります。これを上げますから僕のこととは異常なしにしてください」と

さすがにこれには医者も戸惑ったが、やはり断った。すると乱はさらにこう続けた。

「さっき、僕がすれ違った看護婦さん。名字一緒でしたけど、家族

ですか？」

脅し、三歳の子供が言うには信じられない言葉だった。この脅しに医者は質問内容から解った。乱の異常性、能力性が甘かったことを痛感し、また実行しかねないと解ったため、ディスクを条件にカルテにこう書いた。

『異常無し』と

それから数カ月後、乱には実の妹ができた。乱は妹に面白いものを課したが、家族は誰も彼女が異常だという事には気がつかなかった。ただ不思議と思っていたのは、乱に物凄くなついていたという事だけであつた。

それから数週間後、乱はある事件がきっかけで実の妹とは別の孤児院に入るようになった。

その孤児院で病院で出会った女の子に会い、名前を変え、一緒に上条家に拾われた。

小学二年生になった乱は、何となく『死延足^{デッドロック}』という、いわば不老不死のような能力を使ったが、たいして面白くも無かったためすぐにやめた。そう、やめたはずなのだが、それ以来全くと言っていいほどに背が伸びなくなったのだった。

実の妹とは、今でも連絡は取り合っているし、近々上条家に迎え入れる手はずにもなっている。

というのも、乱が学園都市に行く前ぐらいに実の妹の事を言ったら義母が、

「じゃあ、その子も引き取りましょう」と言っただけであつた。

乱の過去（後書き）

最後らへんがいろいろおかしくなっていると思いますがご了承ください。

オリジナルの異常、過負荷応募しています。
誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

暗部壊滅（前書き）

急展開です。

レベル5の雑魚度が上がります。

なんてめだかな作品になってしまいました。

では本文です

暗部壊滅

S I D E O F F

とある路地裏

「いや、しっかし」

乱が呆れたように愚痴を言う。

「暗部って、こうも脆いのかね？レベル5のいる。『スクール』、『アイテム』なら、もう少し齒ごたえがあると思ったのに」
彼は今さっき『スクール』と『アイテム』を暇つぶしに潰して、その潰された者たちの目の前で愚痴っていた。

「てめえ、ゼツテー殺してやる」

「ん？まだ喋れたんだ。麦野ちゃん」

麦野沈利、この学園都市のレベル5の一人で序列は、第四位。なのだが、この序列は必ずしも強さを表わすのかと言われれば、それは違う。

これはあくまで研究所が得られる利益から決められており、狂や乱の能力は全く何がどうなっているのかが解らない能力であったため、最底辺の第八位、第九位になっていたものであった。

「ああ、俺も麦野に賛成だ」

「ああ。君もか、垣根君」

垣根提督 麦野と同じく、この学園都市のレベル5で、序列は第二位

「あははは！――襲撃するって、俺はちゃんと予告したぜ。それなのに君たちはこのざまだ！どうやって俺を殺すのかな？畏にはめる

「戦力を増強する？六枚羽を使う？なにをするの？楽しみだなあ」
そう、乱は確かに予告をした上で襲撃をした。それでも、この二つの組織は乱にかすり傷どころか触れることすらできなかった。

「テメえ！黙って聞いてりやいい気になりやがって！！！ぶち殺されてえか！！！」

麦野がブチ切れたようで怒鳴ったら、乱は

「え？いやだよ。つか、暗部ってホントに脆いね。いやね、この前『ブロック』『メンバー』『ハウンドドック獵犬部隊』を潰したんだよ。」
「「なっ！！！！？」」

乱が潰したと言ったのは、暗部の主要な部隊名であった。そしてたしかに先日から連絡が途絶えたと上から聞かされていたのであった。

「あ！そうだそうだ。この人生の^{ゲーム}ナインドを上げてみよう。そして少しは楽しくなるかもしれないぜ」
独り言のように、ブツブツと何かを言う乱を呆然と見る暗部の者たち（意識は残されている）。

「そうと決まったら麦野ちゃんと垣根君にもついて来てもらわないとね。学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーのところにね」

そう言うやいなや二人をつかんで『アリバイブロック腑罪証明』を使いどこかえ行く乱。そしてそれを見るしかできなかった、哀れな、そして愚かな敗北者達

窓の無いビル

「何の用だ。上条乱」

ここは俗に窓の無いビルと言われるところであつた。そして先ほどの声の主はアレイスター・クロウリー。この学園都市の統括理事長であり、また創立者でもあつた。

「え？暇つぶしだけど？」

それに何の緊張感も無く、人二人を引きずりながら言う乱。

「・・・はつきり言おう。私は大変迷惑している。暗部組織はともかくレベル5を二人も・・・、よくもやってくれたな」

「んー？そう邪険為さんな。話は変わるけど『悪平等』^{ノットイコール}って知ってる？」

迷惑しているというアレイスターを気にもとめずに、話を切り出す乱。

「・・・よくは知らないが数年前からある組織で、その総数、目的は不明。何をするでもなく、ただあるだけの組織だという事だけは知っている」

自分にもまだ怒りという感情があつたことに気がつきながら言うアレイスター。

「いや、それは『悪平等』^{おれら}であつて、『悪平等』^{ノットイコール}では無いんだよ。

『ノットイコール悪平等』は俺と狂。二人だけさ」
乱の言う、おれら悪平等。これは乱と狂がデュラ ラー！を見て、その中のカラーギャングっぽいもを作ろうとして作った、カルト宗教まがいなものであった

「・・・ふむ、では『きみたち悪平等』はどれくらいいるのだ？」
そう、乱はそれを聞いてほしかったのだ。これで人生がゲーム楽しくなる
と内心喜ぶ乱

「七万人」
ニタァ、と笑いながら言う乱であったがアレイスターの反応は鈍い。それもそのはず、なぜなら七万人と言うのは確かに多いように聞こえるが、この学園都市の総数は230万人。たいして驚くほどの数字では無かったが

「おっと、間違えたぜ。これは創設当時の人数で今は7億人だよ。まあ、ぶっちゃけ人類の10人に一人は『おれら悪平等』なんだよ」
「！！！！？」
これにはアレイスターも驚いた。ただ乱が次に言った言葉にはもつと驚くことになった。

「まあ、この中の大半がその自覚も無く。ただ普通に生きてるだけでも、それでも、たしかに『おれら悪平等』なんだけどね」
この言葉の真の意味は、誰に『きみたち悪平等』かと聞いても解らないと言う事であった。

「何を企んでいる」
何か目的が無ければおかしい。レベル5を二人も潰し、大半の者が存在でさえ知らない学園都市の統括理事長、アレイスター・クロウ

リーに会うなんて。否、例え目的があろうとおかしいことであつた。
だが乱は即答でこう言つた

「え？特にないけど？」

異常、いやそれだけでかたずけるには足りなさすぎた。
だが、アレイスターはこう問い返した。

「・・・ただ、自分の戦力を自慢しに來ただけか？そうだとしたら
今すぐ、消え失せる。それに貴様がどれだけの戦力を持つていよう
が、私のプランには何の支障もきたさない」

アレイスターのプラン、これは誰もよくは知らない事であつた。乱
でさえもよくは知らずにいたが

「そつかー、じゃあ、一方通行も『悪平等』あれらだけどいいよね」

「な・・・に・・・？」

一方通行アクセラレータこの学園都市のレベル5で序列は第一位。そしてアレイス
ターのプランの重要な鍵でもあつた。

「企んではないけど、託卵たくらんではいる。とか言つて！ぶつちやけ何
もかもを、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜたいだけなんだけどね」

乱には、善も悪も、毒も薬も、上も下も、レベル0もレベル5も、
成功も失敗も、何もかもが一緒に見えているんじゃないか、という
懸念でさえもアレイスターは持つてしまつていた。そしてそれは限
りなく正解に近かつた。

暗部壊滅（後書き）

うわー！！！！！！

どうしよう！どうしよう！あと先考えずに書いてったらこっになってしまった！！！！

まあ、何とかなると思ってこれからも書いていききたいと思います。

オリジナルの異常、過負荷を応募しています。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

講演会？（前書き）

お久しぶりです。

予定より大分遅れました。すみません。

では本文です。

講演会？

SIDE OFF

「うーん。ねえ、ここって名門校だよね？」

質問をした、少女のような容姿をしている、彼は上条 乱。男子である。

「は、はい・・・」

そして、自信無下げに答えたのは、とある学校の理事長だった。

「いや、まいったよ。学園都市でも五本の指に入る常盤台中学が、俺一人にトランプゲームで、いい勝負をしているのは、たった一人だけだなんて」

「うーん。そう言われるとオ。言う事が無いんだけどオ」

そう、彼はとある事情で常盤台中学で、講演会をしていたのだが、途中からトランプゲームをしだし名門校ほぼ全員を打ち負かしたのであった。

そして今闘っているのは、食蜂操祈。この学園都市の第五位であり、メンタルアウト能力は心理掌握である少女であった。

「まあ。君はかなりやるね。今はほぼ同点だよ」

彼らが今やっているゲームは、パーフェクトメラノコリイ完全神経衰弱。

ルールは、

？使用するのは2組106枚（『ジョーカーが2枚入っている』のトランプ

？数字だけでなくマークも揃えなければならない

？揃えたカードの『数字』を得点として合計点を競う。ただし『A』は14点として競う。

すなわち総ポイント416点の奪い合いである。

？完全ターン制。ペアの成否に関わらずめくれるのは1ターン2枚のみ。（＝通常の神経衰弱のようなペア成立によるずっと俺のターン！はなし）

？ジョーカーの扱いについて

（1）ジョーカーを引いた場合は場のカードを並べ直す。

（2）一度めくられたジョーカーは場からのける。

（3）ただしジョーカーをペアで揃えた場合はプレイヤー同士の得点がシャッフルされる。

？能力の使用は禁止。

といったものであったが、この二人はばれないように能力をばすか使っていたり、カードの位置をすり返したりするなど、基本ばれなきゃオーケーと言った感じでやっていた。

「うゝん。不毛ねえ。もうやめるう？」

「・・・。確かに不毛だな。もうやめるか」

さすがに二人は不毛だと思ったのか、これをやめたが・・・

「さあ、負け犬ども。罰ゲームでエクレア20個早食いにチャレンジだ。」

「私も手伝うわぁ」

悪魔のような笑みを、浮かべる二人に女子中学生達は戦慄を覚えた。
（カロリー面でも）

「さて、講演会を再開するか」

悪魔の罰ゲームを終えた女子中学生をそっちのけで講演会を続けようとする乱。（もちろん罰ゲームの拒否権は彼女たちには無く、二

人の洗脳関連の能力で操られていたためゆっくり食べることも許されなかった)

「まず、このノーマライズリキッドだが、まあ。人体実験をするのが一番わかりやすいな」

そう言いながら、手頃な中学生に注射した。

「いつ！痛い！？た、助けて誰か！？」

すると例によって苦しみだしたが誰も助けられなかった。

理由は、乱が

「助けるってことは、こいつの代わりにモルモットになるんだな？」と、信頼も何もない言葉を言ったからであった。

「あ、あの！？乱先生！？生徒に何を！？」

勇気ある教師の一人が聞いてきたが、乱は

「うん？こいつの能力を薬で消したただけだが？大丈夫だ。最初のショック死さえなければあとで勝手に効果は消える。能力者の一人や二人消えた所で何もないがな」

何の悪びれも無く、答えた。

「じゃあ。次にこの、^{スーパーボール}超弾道弾だが、このように指で弾くと」
そう言いながら、もう次の物に入っていた。

ちなみに、この講演会は何が主題は誰も何かは解らなかった。

講演会も終わり、乱は自分といい勝負をした、食蜂操祈とメアドを交換し帰ろうとしていたが

「お待ちください！」

「なんだ？ 白井」

ジャツチメント

風紀委員である白井黒子が呼びとめた。

「お姉さまは？お姉さまはどこですの！？」

「刑務所。それからいくつかの研究所で、モルモットでもやっているだろう。それがどうした？」

御坂美琴。乱と闘い惨敗し、殺人未遂などで、刑務所に連れて行かれた犯罪者である。

「ふざけないでくださいまし！お姉さまは何も悪くは無いのですよ
！！！」

「殺人未遂を良くするやつがか？」

「嘘に決まっていますの！！！お姉さまに至ってそのようなことをするなど！！！！」

怒りにまかせ、と言ったことで怒鳴りまくる黒子。

「はあ、こっちの方が不毛だな。いつそ、あいつの身柄をプロデュースにでも引き渡そうかな？」

アリバイブロック
そう言いながら、
腑罪証明で帰宅する乱。

「逃げないでくださいまし！！！！お姉さまを返してくださいまし！！！！！！！！」

怒り任せにどこに行ったかもわからない、乱を探しにテレポートをしようとする黒子だが・・・

「ほう。廊下で怒鳴るとは……。先ほどの方は乱先生か……。黒子、処罰は覚悟しているな？」

寮官に見つかり、処罰を受ける羽目になったのであった。

講演会？（後書き）

うーん。駄文だ!!!

久しぶりに書いたのがこうも駄文だとは・・・
次の話では、吸血殺し編に入りたいと思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。
異常、過負荷も応募しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635w/>

とある異常な義弟と過負荷な義妹

2011年12月5日22時46分発行